

こゝに田子庵と號するいはれば、此家に愛翫せる蛸貝の盃ありて、それを田子浦といふ故也とぞ。そはさらば難波にきこえたる浮瀬屋の出店かといふ人も有ぬべし。そもや浦の名をとりて盃の名とし、亦盃の名をとりて菴の名とす。かくまで

物を用ひたらんに、器財衣服の類ならば手數の入りて古びぬべきに、用る度に新なる田子の名こそめでたけれ。思ふにそ

れ坡翁が亭の名も、其時は左も有つらん。欄によりて散る花を惜み、簾をかゝけて月待夕、よろこばぬ雨もあるべきに、此菴の名のそれには似ず、いふ度閑度に、名におふ佳境俤にうかびて、常に雪月花の風情を添ふ。さてこそあるじ深く愛して、年立かへる屠蘇よりもまつ此物を手

む。其物其名の來由は、かねてあるじの筆に盡せり。我才の藻屑なる、何をか其汀にかきよすべき。只予に酒腸の乏しくて、八仙の仲まにも入らず、是に對しても蛸のいひかひなき、是のみ田子のうらみなるものを。

贈或人書

吾子今講武を以て軒號とし、句にも俳諧にも用ひて名とす。あら面白からずや。

吾子はもとより武門の人也。紙質者の暖簾に紙屋としるし、油賣家の看板に油屋と名のるは、買ふる人のまがふまじきためなれば、其いはれあり。吾子たゞ風雅の最良なるより、武道も一ツに混ぜんとす。私心の迷ひといふべし。槩を横たへて詩を賦するも、扇を敷て歌よみけるも、それはそれは是にして、しかも是を以てそれをあやまらず、それを以て是を害

せず。文武二道と稱するは、其事跡を見て後人はを嘆美せる也。我れと名のるとは甚臭し。五老井が射御の辯すら、或人はを評して曰、其文の始には、武士の武士臭きは鼻を掩ふと誓て、人の誇りに針をさし、武藝をあてにすべからずといひて、他の嘲に蓋をして、さて其末に書たる一篇、臭きと糞土のぞく、藝の自慢は傍若無人也。律を知りたる僧の破戒無慙と、經學にわたりたる人の不行跡なるは、あしきをしりつゝあしきをなせば、世にいふ三寶の捨物にして、異見も療治もほどにす所なし。白藏主も口を閉、扁鵲も手を袖にして、只つゝさせて見るより外なし。新當流も正法念流も、もとより武士の常にして、それがこゝへ出るゝにはあらず。誰か武門に生れて是をたしなまざるべき。二流三流の印可免許も、此邊にては珍らしからず。天下の名人はおの

づから人もしり、世に顯はれて各別のさ
た也。世に馬を見ると云人あれど、山上
入道の名をだにしらすとは、入道が身に
とりては迷惑なる披露なるべし。昔或人
歌を自讃して、この歌の心の奥はよもし
らじ定家家隆も釋迦も達摩も、と讀たる
返しに、釋迦達摩定家家隆もしらぬう
たくそのやくにもたぬなりけり、とは
よみしか。其ためしも思ひ出らる。師匠
が下手ならば、弟子は師匠を越すもある
べし。只我のみにほこるは遼東の冢也。
めづらしさうにかきたるにて、のこりの
衆の思ひやられて、と云或狂歌の下の句
やつくべからむ。佐々木梶原が先陣を許
して、搦手數万の油斷人一騎も残らずわ
たしたれば、鎌倉にての荒言も少しは是
にて戻りけりとは、余りに不案内なる心
得違ひ也。二騎より外渡されぬ川ならば、
何しに不覺の先陣して犬死をばすべき。

後陣のつよく川と見たればこそ先登の功
は立たれ。抑武藝十万人に勝れたりとも、
用る所不義ならば、明智を誅せし土民の
竹鐺にも劣るべし。しかるに功なり名と
けて余力あらば、仁義五常の道を學びも
すべしとは、基象戲も舞謠もおなじ物と
覺えたる也。そもや五常の規矩にはづれ
て、何を以て其功をなし、何を以て其名
をとけむ。家を建て後に地築せよといふ
がどし。功なり名遂るとは、我が行ひの
仕上を云也。老子は身退けといひたる、
已に暮合頃ぞかし。夫から仁義の學問は、
隠居してからいろは習ふに異ならず。仁
義五常と云詞も重言にしてくどし。外に
數三線にのせる五常もあるかはしらねど、
先づは五常のうちに仁義はありて、仁義
五常といふに及ばず。願人坊主がかのえ
庚申くくとよびありくとおなじ也。我
はそも俳諧はしらねど、釋迦の鼻をせし
りたる蠅が金色の光もさす、孔子の肌
着を這たる蚤に道德備はる物にもあらず。
勸學院の雀が蒙求を囀れども、だみたる
聲を啼ぬ也けりと、鄙生立をほめたる鶯
には及ぶべからず。されば其世に生れ合
せて、碩徳の直弟とても必上手とも極め
がたし。しかるに滑稽傳直指の傳を見れ
ば、祖翁の血脉をうけて俳諧文章の名人
は、我一人也とはすゝどし。そも又翁の
方からも、此一人に渡したりとの實上け
證文のさたを聞かねば、心もとなき様な
れど、俳諧は定めて上手にてやありけむ。
武士道は只臭くして覆くはおほえず。泰
平の代に手ぐすね引て、楠村上が上に立
むと大言いふ人も、其場に臨み其とにあ
づからされば、ほかくとはうけとられ
ず。さるを聖賢もこり給ひて、言を以て
人を舉ずとはの給へり。是を我里にては
陰辨慶とはいふ也けり。文選は俳諧の文

集とこそきじ。此一篇にやさしきと葉もをかき語もなし。我子への異見ならば、

部屋の壁にはり置にはしかじ。何故に此辯はありやと、潜に誘ひたる人もありしぞかし。是臭きが故に蠅のたかるがどく、人も其非をいひたがる物なり。されば武を講ずるも兵を鍛ふも、武士には勿論と云附合なれば、俳諧においてはというるさし。早々此號を改給ふべし。我も武門に生れたれば、第一に先ツ鼻を掩ふ。たゞしかくいふも則臭きやらん。さればこそ臭きもの身しらすといへば、少しの匂ひは寧し給ふべからず。

俳席掟

- 一 椅を取るに辭義あるまじき事。
- 一 一夜更て時を問ふべからざる事。
- 一 但勝手の躰におどろくべからず。
- 一 世間ばなしにわやつく人は、たとひ

王衍が蠅尾を揮ふとも、嵯園の居眠には劣るべし。

右先達ての定にもれたるを拾うて菴の新制とす。飲食もとより亭主の了簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は言譯に似たらんも口をし。そも奈良茶にも限るべからず。なら茶の奈良茶なる心を守らば、菜めしも麥飯も則三石の内としるべし。

贈人俳席定

- 一 飯はなら茶専用なるべし。汁なきは勿論にして、奈良茶ならずば汁あるべし。
- 一 菜は一ツとして魚鳥は有に任せ、珍奇を必求むべからず。なき時は豆腐茄子に、精進ならぬ言譯は、かつをといふものあらざらんや。
- 一 香の物は論ずるに及ばず。
- 一 もしは麵類の好ありとも、定規は右

に准べし。

- 一 酒は盃に大小あれば、上戸とても二献に限るべし。

酒に肴といふ物は、すまぬ酒をすむる助にして、もとよりも宴會ならねば、しひてすむる道理はなし。しかれば肴は不用なれども、膳に一菜の乏しければ、若は到來殺生の物あらば、肴と名づけて一種もあらむは亭主の心に任すべし。或は雪霜の夜風に歸路の寒さを防むには、餅後の餺飩を殘し置て、一坐蠅尾の上において一酌をめぐらすも、又其時の模様によるべし。それとても一種二盃の掟を堅く背べからず、相撲芝居の果は必喧嘩に成りやすく、俳諧の集會の飲食に流たがるは、今世のならはしにて、其道の歎なるをや。されば翁のなら茶三石は、皆人の口實としながら、其しめしを思ふ人少し。なら茶といへば汁一ツをだに省く

教なれば、まして茶敷を著むや。さしみの、鯨の、壺の、平のと、奈良茶の膳にならべむは、たとへば行脚の僧の、頭陀をすてゝ荷馬荷持をつれたるがどく、本姿本情にあらざるとをしるべし。梅二なるをのこ、此とを恐れて予に俳席の掟を請ふ。道に信ある志を賞して、鏝具の定をしるして贈るもの也。

硯鄙文

動靜壽夭の論をなして、硯の壽は世々を斗ふといへり。石の性は硬くして、もとより筆墨の類にはあらず。その管ともいふべけれど、只事はるゝ身の幸によるもの歟。たとへば燈石となりては鏡にもまれてうち碎かれ、其齡は月を以てかぞふべし。あるはまた挽磨と用られては、おどろ／＼しく挽廻され、目きりの親仁に蔽かれては、是も齡はたゞ年を斗へぬべし。

し。これらは皆下さまの姥嫁に仕はれて、貴介膝もとの勤にあらず。さればかの硯は昵近のつとめにして、さてや世を以て計ふべき己が壽をも遂なるべきをや。こゝに山田生は、致仕大夫鏡徹君の近侍にして、多年の奉公他にとに、寵遇のあまり一面の硯を賜ふ。常に拜して是を秘藏す。予に硯の記を求むるに、此ぬしの勤るところ硯のつとめに似たらむには、ともに幾代の春永くつかへ奉るべき行末を賀して、筆にまかせてかきおくりぬ。

仍某求作序

其人のために此人の此集編るといかにぞや。紫の露のゆかりあるにもあらず、只風月の席に交ると年あり。さるも其齡をたくらぶるに、かれは八十宇治川もわたり過、是はこゆるぎのいそにもいまだ至らねば、いざ月見む、いざ雪見むと、さ

そふもいさなふも、おのづから物好のたがふふし／＼もあらざらむや。かれは此ためにねぶたき月をも詠め、是は彼の爲に惜き雪をも見捨て、さてや莫逆の遊びをなしけむは、祀興梨來が交にも、厚は勝る方にやあらむ。そもや彼の老は風雅に遊び、客を愛し緇素の友に信ありて万にたのみ思へる人多ければ、此別を惜む涙、墓栢も色のかはるばかりになむ。さるを思へば、それらも只口にいひ、心にこそため、今此時に此集を編て、其人の跡とふは誰ぞ。獨此人に止りけること、手向の山の郭公も雲のそなたに呼つれて、此信いかで其魂に届かざるべき。

傍睨亭記

應 野呂氏啓

こゝに新に此居いとなむと聞しは更に久しからねど、いざ又隈なき軒端に鳥もなじますと、思ひやりしにはさまかはりて、

木立ものふり竹も陰ふかめて、只此ころのやうにもなきは、いかにあるじの心つくせるにかあらん。あるじは猶年わかうして、身は世路に立ながら、こゝに半日の閑をうる時は、窓に高嶺の月を招き、池に頴川のながれを引て、官暇塵衡の耳を洗ふ。そこに水鳥の馴ておどろかざる

は、かの鷗のためならでも人の心をよくしるならん。されば昔蜀山兀として阿房出づ。今田を埋んで傍睨なんぬ。百尺の樓閣八疊の座敷、足れる心の二ッやは有。それは天下に猛威をふるへば、やがて楚人の手に毀たれ、是は僻地に閑寂をたのしめば、老の行へを養ふのみにあらず、千代まつ岩に苔を敷てかの青氈のおもひをなさば、長く子孫を守り傳えて、こや色かへぬ幽居なるべし。たま／＼爰の門敲きける日、あるじ一筆の記を求む。されば最勝寺の額書て後悔けむ人も有しが、

我既に老にむかへり、よし名をおもふ人ならばこそと、東籬のもとに酔に乘じて、つひに狂語一篇をとどむ。中々勝景をけがすわざにして、あはれ此句なからましかばと、にくみおもはむ人もありぬべし。

蘭をとりてみる山のは、西にあり

一 德癡

鞠をすかぬ人は九損ありとそしり、好く人は一德ありと尊ぶ。あらゆる遊藝、九損はこれに限べからず。もしいは十損もしりがたし。さはいへいかなる不用の事にし、しひて求れば一德もなきといふ事なし。つら／＼おもふに、人のもとめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備りたる業は何ぞといふに、只飲食と二便にとどまる。然るに飲食の重きこと、聖主の國を養ひ民をめぐむといへるも、畢竟はたゞ飲食なり。さるから奢れば法にす

ぎて、三條中納言の太食には醫師もあきて迹、何曾が万錢には料理人の手も廻らす。されど二便はこれが類にてもなし。雪隠に高麗縁の疊を敷、きんかくしに蒔繪を粧ひ、たとひおかはを梨子地にするとても、いくばくの費をかなさん。道具好の茶人とても、南京青磁のしゆ瓶は尋ねず。しかれば出入の違ひありて、飲食とは各別のさた也。そも又大小の二ッが中に、大は人の平生に長雪隠の時をうつすも、纔に一晝夜に一兩度に過す。只小便のわづらはしき、さのみ隙はとらねども、しきりに是を催す時は、いかなる公卿僧正も輿車にたまりかね、武者の戰場に急なる場にも、草摺をたゞみ上て、思はぬ敵に後をもみすべし。まして談義芝居の中に、こらへ袋の切かゝる時は、群集の膝をおし分出て、往生の要文を聞もらし、大事の狂言の所作を見殘す。あるは

下馬先に供をはづす鎗持、長舟にもみ尻する女中など、是が爲に惱さるゝ事世に多し。されど馬方小揚の身の上のみ、あるきながらもやり放し、清水をけがし、雪にも跡をつけて、人目を恥ぬは論するにたらず。かくとりへなき物なれども、猶其徳を尋るに、地藏の開眼に一休の法力は、茶のみ嘶の眞偽をしらず。昔鴻門の會に、高祖は是にかこつけて危き座敷をはづし給ひ、越王はこれをなめて會稽の耻をすゝぐ。今も世上の途中にて、いかなる人に行あうたる時は、たちやどるべき家もなく、逆る方なき道芝の露とこたへて消たき時には、件の用をとゝのふ振にて、やがて溝端に後をむけて、時宜にもおよばすやり過したるぞ、此ことなくてはいかで此難をのがれん。これを小便にも一徳ありといふべし。幼子の居びたれば乳母の油斷と叱られて、其子の科

にはならざるを、老人の取はづしは、子にもはづかしく嫌にうとまれて、老てふたゞび兒とはいへど、昔の兒より大きにきたなし。さらでも老の身の苦しき、霜沍る夜もすがら、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかぬ顔に詠めて折ゝかよふ寒さは、御衣をぬがせ給ひけん有がたき御心にも、是迄の事はおほしもよらざるべし。あはれ今宵も風さわがし、幾度の行かひかせんと、寐よとの鐘に寐所とゝのへて、例の椽はなにもまづ立出たるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のから／＼と鳴音のしければ、一首はかうぞおもひつきける。

死さまに念佛申さぬ人はあれど
ねさまに小便せぬ人ぞなき

東南東湖兩筆の万歳の書賛

師の書けるを發句として、弟子のこれに書添たるは、則脇の趣あり。我も又其跋にはやされて、かたはらに筆をとる。是や此第贊也といふべし。

節季ゆにつもりし雪を万歳の
けさとくわかの春は來にけり

若菜實序

七十二候の三ツが一ツを省て俳諧の月令あり。養月文樵の二士、集のもやうとして予に序を請ふ。是田鼠に羽がはえて深草の秋に啼、雀が踊忘れて桑名の松かさに焼るゝなど、怪しき説にはあらず。誰も見て疑はざる俗間の有ことなり。蕉門正風の本意かくこそあらめ。乍塵生か是非諧は上手にうそをつくとは。よしや世に煩惱あれば菩提あり、うそあれば誠あり。柳はみどり花は紅の色と悟れば、すべて俳諧の種にして、紉の神に問ふもよ

しなし。君見すや、たとへば彼の田鼠も
鴉となりて初て和歌によまれ、雀は蛤と
なりて後歌人には見限らる。夫も是も漏
さるは我が俳諧の大綱なるをや。かゝる
自在の手にえらまば何ぞかならざらむ。
いざ見ぬ國のとはさもあらばあれ、和朝
に民の時をしる、是や月令の始なるべし。

棧集小序

我庵に隣せし咄々庵のぬし、名におふ蕎
麥の花咲ころ、木曾の旅にとて假初に別
れし袂も、ことしの春に指折れば、早蕨
の片手握る斗になん。かくて行先々のこ
とをきけば、岐岨のかり麻におもひ立て、
そこに翁の一句をしるし、棧のあたりに
一堆の塚を築き、旅客のしたふ便とし、

それより越路の雪をふみ、奥の細道の跡
までめぐりて、國々の句を拾ひ、今は武
城に錫を休めしとぞ。頃日隅田の春雁に

消息をつたへ、まめなる便に此事を告こ
しぬ。實や經氏の説にきく、聚沙爲佛
塔、功德猶空しからずとなり。夫は一時の
まさなごとをさへに、まして永き世に此
跡を遺せる祖翁の追福、何ごとか是にま
さるべき。其句どもや、頭陀に滿れば、
まづ東都の梓工をかたらひて編集一部の
口をひらくと、余に其小序の望あり。江
戸は騷士の輻輳する所、隣に乞途に需む
とも、かばかりの一語はいと安からんを、
遠く老拙に此望を思ふに、さすがに法規
の扇に泣き、漢の食を願ひしためし、旅
客の情の故あるにかこち、殊には雁の便
をよろこび、人の笑ひもこりすまに、ま
たすゞろなる筆をとりぬ。噫我病の膏肓
に入るか。

咄々房挽歌并序

咄々房委通は、一たび天台の教に入、

豆腐菹蕪の清僧なりしを、いかにおもへ
るならむ、只かしらのみ其儘にて、袂は
浮世の色にそみかへり、或は和歌を學び
茶に樂み、殊には俳諧に遊ぶ狂客とはな
れりけり。かくて其身の年もつもりて後、
我隱家の蓬生かく一廬を結びてすみ
ければ、明くれに事とひかはせしが、七
年ばかりのさきならむ、信濃へ行脚し、
夫より北越に渡り、奥羽の隈まで見む
とて、菴はあたりの人に預け置て、杖笠
にうかれ出しが、はいのごとく打巡て、
頃日は武藏に情ある宿かり求て、暫尻の
あたゝまりぬるよしきこえかはしぬ。さ
るに信濃路や木曾の旅ねに夜をかさねし
ほど、そこの人々をかたらひて、名にお
ふ棧のもとに一基の塚をいとなみ、翁の
句を表して、ゆきゝの好士の跡したふた
づきとはなせりとぞ。猶夫よりの行先々
に此句を乞ひすゝめて、やゝ一軸をなす

ばかりなれば、棧家を撰集して世に行はむの志ありとて、過し夏の頃予に小序の求もせしが、其事なかばにして病にかゝり、此長月の廿日あまり卒に夜臺の客とはなりぬ。かなしむべし、をしむべし。

只年々になき數をそへて、老の心をいたましむよ。齡又われと同じかりければ、過し行李の頃はことにうらやみて、我はかく病みおとろへたるに、猶四方の志あるいさましきよ。さるにてもかくまで人の強弱はたがへるものか。是や世の定むまじきさだめならんと、思ひもしいひもせしが、我身の露はかく残りて、其人の爲に袖ぬらすや。是又定むまじき世のさだめにはありけり。驢鳴の挽歌を裁して曰、
木曾路に假の旅とて別しが
武藏野に長うらみ成ぬる
呼べばこたふ松の風
消てもろし水の漚

わすれめや 茶に語し月雪の夜
おもはずよ 茶に悲しむ露霜の秋

薙は鼠の巢にあれて 蝙蝠群て遊

垣は犬の道あけて 蟋蟀啼て愁

昔の文なほ残 老の涙まづ流

よしかけ橋の雲にかゝらば

招くに魂もかへらんや不

悼楚巾子文

卯月末の四日に消息あり。使のをこの外へまかりて、返事は後取待らんとて、さし置いて出ける。其文をひらけば、尋常の無事を問終りて、此頃かしえさせたる双紙のおもしろくて、永き日をまぎれぬ。猶是が末の巻取かへてかしてよなど、其事ならぬ明くれのすさびも、例の筆まめにこまやかに見えたるに、そこへに返事とものへ、使のかへり來むをまつ程も久しからず、其家の從者のもとよりあ

はたゞしき便して、此老今俄に終り給へりと告こしたるを、誠にあされたる世のさまなりける。齡は八十に猶一をそへて、さこそは天年の終なりけめど、かくまであだならんとは誰かはおもひかけじ。朝につく杖はとりながら、耳目もなほおとろへず、浮世の是非を渡り盡して、古きためしもよくしれるうへ、人の爲に事をはかるもまめやかに物し給へば、よろつにたのもしき人にして、若き人とも遠ざけず、常に出入る人、文をかよはし音信して、門には苔のみどりもみず。朝にとひ夕になくさみて、かたらふ友のとはしからねば、九人はなしと數つる白氏が酬和の恨も薄かりけむ。さるは老のにけなくも身の靜ならぬをとて、あざむく人もあるべけれど、すべて老はむづかしとて世にうとまれ勝なるには、かゝる老の生涯は、なべての人のまねびがたき業に、

うらやむ者はた少からざらん。我にも忘
年の交久しかりければ、是より後の明く
れには、あらましかばとおもふ悔あらで
やは有べき。よはひは恨なき齡ともいへ、
別はうらめしきわかれ也けり。

弓張の梓にもよれほとゝぎす

方笠庵記

隱二松崎氏簡一

方笠庵のぬし、方笠庵をいとなみて方笠
庵の記をもとむ。けだし此庵に此名をよ
ぶ事、いかならんとゆかしむに、たゞ世
を例の洒落に見破りて、爰に五十年の尻
をすゆるとも、味噌する朝、茶を煎るゆ
ふべも世帯にほだされず。耳目は四季の
花鳥にあそばせ、吟魂は千里の雲水にか
けめぐりて、是をいかいの笠とおもへる
にや。方の一字は、笠のかさならぬ形を
さしていふなるべし。さるは蟻通の明神
もゆるし給へば、箱根今切の關守もとが

めず。あるは吉野の櫻みせんとうかれし
も、市人に是うらんと雪に狂せし昔人も、
居ながら爰の佛にぞみるらん。されば世
の俗客は、此庵のありとはみえて、是が
笠なる事をしらす。あるじは是が笠なる
事をさとりて、これが菴なる事をしる。
いざや我も此道の同行なり。春はござれ
と諷ひ古せし拔參といふ物の眞似せん
と、此笠の端に書付侍る。

袋 贊

器は入るゝ物をして己が方円に従へむと
し、袋は入るゝ物に隨て己が方円を必と
せず。實なる時は肩に余り、虚なる時は
たゝみて懷に隠る。虚實の自在をしる布
の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月花の袋や形は定まらず

花瓶臺記

井戸車の古びたるを以て花瓶の臺となせ
るあり。是はある官邸の天井のうへにか
くろへて、塵にうつもれありしを見出て、
面白き容なりとて其片面に漆して、かく
風流なる物とはなれり。さればにや、渠
がむかしを思ふに、至つて危き所にかゝ
り、若水の晨より大晦日の風呂の夕べま
で、一日も休するとなし。其古びたるさ
まを見るに、それも暫のほどにはあらじ。
影うつせしうなひ子のふりわけがみよ
り、檜垣の軀みつわぐむまでも見果し
ならむ。さてや其危きを経つくし、いそ
がしきを仕果して、今の身の安く靜なる
と、釣瓶の露ばかりも昔に似たるとなし。
さもいそがはしかりしほどは、あやしの
五助六助にまはされ、飯たきの玉や竹が
手にのみひかれつらん。物換り星うつり
て、玉も六助も今何くにかある。思ひき
や、ひとり此物の身を全うして、今は疊

に登り、花瓶を負て、大賓貴客のために
も聊も床を下らず。かゝる貴き行末なら
むとは。昔の菜刀今の劔ともいふべから
む。かく安く靜にしてこそ、千世の壽も
持ぬべし。そも又摺鉢の缺けて大の飯器
に下られ、磨の引わけられて踏石となる
など、靜なりとも何の面目かあらむ。只
此物の宿世こそありがたけれ。人も少壯
の頃は、世につれ、とにあづかる習ひ、
危き所にも身をおき、いそがしき勉も道

るべからず。其難をつゝがなく越えすま
して、かく安靜の境に至らむは、誠にあ
やかきものなるをや。それも只ひとへに
かく用る人にあひける幸ぞかし。もと此
ぬしのつかへたてまつる老君の、是を物
好て久しく座右にもてあそび給ひしを、
新居を卜せし歡とて賜りけると也。愛藏
すると思ふべなるかな。予に一語の記を求
るまゝ、思ひよれる趣を漫に筆して贈と
に成ぬ。

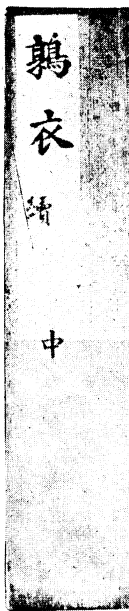
さく花や交てにしきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町にさじの廻らぬ醫師あり。三
年に三度名をかふるに、かの鼻のおなじ
音を啼て他の里へうつるの噓にして、は
やらぬはもとのはやらぬ也。夜話亭に三
度の撰集ありて、題號は同じ朗詠なり。
かの醫師を見て是をしりぬ。よく人のも
てはやすとを賀すべし。

爲或人書序

五十にして親を慕ふは、世にありがたき
ためしとは、昔大賢もの給ひし。七十に
して慕ふ人、今參陽の箕山翁か。此秋先
考の五十回の忌に、佛事作善のいとなみ
はさら也。其生前にすける道とて、四方
の俳士に手向の句をもとむ。されば心の
水の淺からぬより、かけ見ぬ人までもよ



宇都良衣

續編 中

贈ニ交花堂ニ

住柳町ニ

所の名にふる遍昭が見わたせばのうたを
思ひよりて、かくのごとく書て贈りし。
時も今春の半なれば、東坡が亭に名づけ
たる前蹤にも似たらむにや。此心を一向
にいはゞ、

せおくり、やどなきかたにもきこえあけて、かたじけなく給はりし句どももありとか。誠に人を動すと、いつぱりにはあらざりけり。そもかの先人列志子は、貞享元祿の比にありて、其角嵐雪が曹を友として、深く風雅に遊べりとぞ。其世の詠句は古集にも見えたり。其子うまごまでも猶風月の才に富ると、ためしはた世に多からむや。昔曾子が羊羹を食はざるは、父の嗜しとをわすれされば也。今此箕山子の俳諧を翫るも、又父の嗜るを慕へば也。それは孝よりして捨、是は孝よりしてすてず。捨ると捨ぬと表裏ながら、追慕孝情の重さを荷はど、只釣がねとつり鐘にして、挑灯のさたに及ばず。もとより挑灯、何ぞたのまむ。孝子の追福、よく其閑はてらすべしとぞ。

新古菴記

數奇者ありて、其閑居に名あらむとを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがどし。つるに辭しまけて止とをえず。されば予が辭するは茶道に疎ければ也。しらざれどもはた是を思ふに、此道はそも古式ありて、一事一蓋も短をはづさず、はづせば放埒の謗りあり。茶抄のあつかひ、ふくささばきも、さすてひくでの舞曲ならねば、さして上手のけじめもわかれじ。しかれば古き二の舞して何の面白きとあらむ。それを面白がるは其故あり。同じとのかはらざれども、きのふの古きも、けふすればあらし、けふの新きはあすの古きにして、まして道具の古きを賞すれども、用る心は日々にあたらし。新しき物の古くなるは天地自然のところに、古き物のあたらしくなるは、人の才覺智のはたらきなるをや。さればこそ目に見えぬ鬼神も我を折、武きものゝふも丸腰の交をなせば、一椀のつけさしに男女の中立とも成べきを、傾城の客なき宵を御茶ひくとはいひかぞや。予が此論もし偶中ならば、あるじの取るとあるべし。そこを天道まかせにして、新古菴の記と題して贈りぬ。誠はせめをのがれむための御茶にごらすといふ物か。もし早合点の人聞て、しんことは園子のとかといはど、よしそれも茶うけのさびとなるべし。

贈或法師辭

衣を墨に染ねども世を通れたる法師あり。むかしは城下に富る家、たれかれとかぞふるには、指一本のあるじなりしが、利欲に心のうときより、畢竟は無分別の三字に、家居も藏も盧生が夢となして、蒔る種の菜の花と咲日は、身を蝶々の袖かろうくかれありきて、今は寢覺樂也と

ぞいへりける。さるにかの祖翁のゆむ仕

菴も、人の住捨ける跡なりとぞ。其椎の

木の陰を慕へば、おのづから似るとあり

て、こゝに一廬の主とはなりけり。もと

すみし主は茶に遊ぶ人なりとぞ。けに窓

も垣ねもよしあるさまなり。されば境に

よりて心を轉ずとか。聊あるじのために

いはむ。昔の數寄者、今の俳諧、其風流は

通ひもすらん、心はおのづからけじめや

わかるべき。そもや茶道は、すべての調

度も古き物をと愛るが中にも、長月頃の

水仙をたづね、雪間に嫩菜をさがし、三

月の筍も孝行のさたにはあらず。なべて

はしりの初物を争へば、二月の梅秋の茄

子は捨る心も早からむ。これらを風雅の

上に思へば、年の内の梅のみこそ花なき

時の賞翫なれ。其余ははしりの物を問は

ず、只のこる雪残る花、螢も菊も名残を

慕ひ、おくれし物を四季に憐みて、行く

物はなじめども、来るは物の時節に任す。

さらでも隨行駒の足に心の鞭は加ふるゝ

なし。是は茶人を誘るにはあらず。其

道よのよる所にして、こゝに風雅の本意

をしるべしとぞ。

紙袋序

其考句集 其子詞同が次に題す。

紙袋を披けば金玉有。錦幾重に包たる宋

人の燕石もあるを、是かの綱を倚にすと

いへるかしくき教にして叶ふ物か。され

ば其玉も價をもとめてうらんとにはあ

ず。只これ父を慕ふ孝子の手になれるな

り。そもやよしのゝ春にあはざりし人も、

青葉の木末しけきを見ては、さこそと花

は思ひしりぬべし。今此集に序を請れて、

生前の至孝問はずしていちじるし。人其

誠を感じざらむや。我が辭せずして筆を

とるも、此とのかくあれば也。

九日寄服先生二辭

我を生むものは父母也。我を蘇する者は

先生なり。僕が今年の秋いたく病るや、

此六十こそ我が世のかぎりなりけれど、

みづからも思ひ、人も左思へるにや。さ

し向ひてはいはざれども、つきしろうさ

まいちじるし。さるを先生の良劑、日を

かさね、再九死の地を出て、世は今草木

黄み落、虫の音よわり行ほど、我は引た

がへて心地たのめしう、菊祝ふけふは聊

盃をさへ手にふるれば、したしきものだ

もの、たと此翁を拾ひたるものゝどく笑

ひのゝしるさま、いとうれしけなり。さ

ながら例の一辭は止す、つたなき狂句し

て、けふの歡を先生に告るとしかり。

菊の日やまづ初立の東籬まで

三士挽歌

只年々の上をおもふにも、あるはなき無きは數そふと歎くは老の常なるを、今年いかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。睦月も若菜つむ頃、有齋子世をさりぬ。

十くだりにたらでなき身や初曆と袖の涙もかわかぬに、其廿日餘り百積身まかりぬ。かれはおなじ世を捨人、とに住菴も呼びかはすばかりなれば、明暮にかたらししを、立登る無常の煙も見るかたにたなびけば、猶思ひ出るふしゝも多し。

摘菜せし友を其野の煙とは是だにさしつどふ悲なるを、きさらぎの初、再兒子江戸にてうせけるよし。嗚呼今年はいかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。

なきかずに指をる厥はる寒し

爾住菴説

こゝにしか住ける法師の、妻もち魚喰て、尊きとはなけれど、只世を遁れ風雅に遊ぶとの聊喜撰に似たらむと、筆にまかせてかく書贈れる也。よし今は世にたゝぬ身を、たつみとは人もいはずとぞ。

示先以辭

横須賀の先以は桶を結を以て業とす。深く蕉門の風雅に耽り、手は世渡りの隙なきも、心は向上の月花に遊ぶ。知多の浦浪かへすゝも、千逢ふ時はかれにしめす。風雅を以家業を妨ぐべからず、家業を以風雅は妨ぐべし。せぬも其日の俳諧にして、障るも其夜の俳諧なり。此と五論によくいへり。あはでやみにしうさをおもひ、仇なる契をかこつをこそ、色好まむとはいはめと高く論ずれば、戀すら

かくのどし。まして俳諧においてをや。月更ては十市の里の哀にも通ふらんと、丁東舎と書て與へぬ。只其響の家にたえず、いとまも浪の音さへ打添て、長く風雅の冥加もあれと也。

如是菴挽詞

かりそめの旅とて立別れしが、はかなくも遠きあふみの土となりし南空坊が魂に告。むかし祖翁は浪華の露と消え、嵐雪(蘭)は鎌倉の月に身を終ふ。もとより俳諧行脚の調する所かくのどしとしれば、如是菴何ぞうらみむ。何ぞ驚くべき。さはいへ齢は一ツの兄にして、交りし我が年月も久し。嗚呼哀れなるかな。此度は不之菴におくれ、今亦此漢を愴。老の身のいつれか人の上には見聞ならむ。

呼ぶかひもなし 羈鷹の雲陰

與有功子二書

愛して其惡きを知り、憎て其よきをしれとが。人を以言を捨ずとも聞けり。花に轉る鶯も夜なかなぬはわるし。蟲ほる鳥も月に啼くはよしと、世におほやけの眼こそあらまほしけれ。そもや我若き時君をしらず。一度見て肝膽をかたぶく。君はもとより和漢の才に富て、詩を以府下に鳴る。且俳諧に遊ては貴賤の情を知ると敏、口を開けば玉を吐、筆をとれば錦を綴る。我が鶉の群にはあらず。思ふにいかなる夙縁にや、君がいふと我が心に違はず、我が云と君に叶ふ。あはれ老の身の容をてらす鏡は、今あるとても何かせむ。我が俳諧の好惡をてらすに、君をますみの鏡とせむに、五十餘年の非をもしるべしと、今や老後の力を得たり。つらく君が俳諧を見るに、もと露川が藍に

出るがどしといへども、其藍の藍ならざるをしりて其色を慕はず。今たゞ濃きみどりは獨染出せる物也。このごろひそかに論ずる所、文操十論の上において、誠に我多年睥睨するところ、涓埃もたがはず。不思議や、しらず我魂もし君が懷をかるかと、一度は驚き一度は嘆ず。こゝに論ぜむ。抑東花坊は蕉門の逸物也。昔葛の松原より續五論を著す。委情花實附合の論、實に俳諧の骨髓を顯はす。其後東西夜話夏衣、所々に云物、金言妙說少からず。ざるを惜べしみづから終焉の記を書て、支考の名をなきものに擬してよき、すべての咎を蓮二に謂せて、文鑑を選して自註をはゞからず、文操を編て眞名の新製に及ぶ。十論を著ては虚實を論じ、名に俳諧の二字を假れども、長助李助が耳に入らず。酒はやしして餅賣がどし。徒然草の賛は俳學のさたに及ばず。

毀譽は見る人の心にあるべし。かの君がいふ所、確論にして殘さず。今はた是に何をか加へむ。しかるに先にいふどく、我君を鏡とせむには、我又清き光なくとも、只潦水の淺きを耻す。聊君をてらさむとす。其いふ所他にあらず。君、蓮二を謗るをきけども、いまだ支考を稱するを見ず。儒士は釋氏を防けども、其説のよろしきあれば潜にとりて身の上の益とし、佛徒は儒道をいやしめども、其の理に叶へば聊用ひて今日の法とす。内證皆かくのどし。況や支考は蕉門の俊良也。舊説もとより規矩とすべし。かの文操十論の説においても、猶俳諧にとるべき物少からず。君俳諧の益をもとむるに、必是を誤るとなかれ。そも我は君が愛する物なり。君もし憎てよきを忘れむは、其損只君にあり。君もし愛して惡きを知らずば、其損我にありて、くもれる鏡にむ

かふがどくならむ。歎く所こゝにあり。
呵々。今書をよせて寸志をいふ。多言ま
とに恐るべし。但我君にかくすとなし。
君はた我をいかる者ならんや。知雨亭の
秋日にふかく、川崎やが酒日々に厚し。
訪れむといづれの日ぞ。又一飲に相笑ひ
て三秋の悶を解むのみ。多罪々々。

秋の日の序

蕉翁生前の七部集とて世にあがむるが中
に、冬の日の集は尾は五哥仙ともいふ
なりけり。しかるに暮雨巷の門人騷六な
る者の家につたへとむむる一巻の哥仙あ
り。これは往昔竹葉軒のあるじの、翁を
招きて其日になれるものにして、其坐の
荷が筆したるまゝに遺せる也。いづれ
の集に出たりとも見えず。されば暮雨巷
曉臺子、是ををしみ是を尊みて、社中を
かたらひて四巻の哥仙をつらね、再尾張

五歌仙を繼むとす。稿なりて閑するに、
誰かは狗の尾をもつて貂を續たりといふ
べき。祖翁の魂もしかへりきたるとも、
青眼にして賞し給はむ。今人なしといふ
べからず。實に本州の面起すといふべ
し。淨寫に臨て予に一語をそへよと請は
る。嗟乎是また蕉門の盛事也。何ぞ口を
噤んやと、年は明和の五めぐり、龍證方に
集る、頃もあひに逢ふ冬の日の短き筆さ
しぬらして、聊責をふさぐとしかり。

郭公文臺記

郭公の文臺は、名におふ二見瀉の浪に立
並ばむとはあらず。昔持ける文臺は、
世を連れかくれ入ける頃、今は蓬がもと
に客をかぞへて、奈良茶たぐべき身にも
あらず、さらば不用の物はなきこそまさ
らめと、ほしがる人に打くれて過ける程
も二十年に近し。邇日謬載なるをこの訪

ひきて物語ける序に、此輩に此物なきは
寺に鉦なき心地ぞする、かばかりの物一ッ
何の所せきとかあらむ、かゝるとよく心
得たる者あれば翁のために遠らせんと、
しひてすゝむ。けに思へば懐紙を櫃の
みにあらず、坐右にあらばよろづにたよ
りよきともあるべし。長明が車につみて、
建つ崩しつ、とそぎたる方丈にだにも、
折琴繼琵琶を貯たるためしを思ふに、あ
らばさてありなむ。さるにても今世に此
道の行はるゝとや、凡心なき惣内全兵が
徒まで、家に一脚の二見なきは稀なり。
さるから裏書々々の望たえす。老の手も
たゆきばかり、夢にも見え幻にも立がど
く、いとむづかし。只藪もうらがきもな
き物あらばやと、この一脚を新製して草
廬の藏物とはなせる也。身の後に財のこ
るは吉田の法師も憎しが、心とめけむと
云べき程にもあらず、よからぬ物をとの

誇りもあらじ。且此名をかくよぶは、もし見る人あらば見てしるべきのみ。

一聲や二見にかよふほととぎす

白藏主賛

醫者の若死少からず。出家の地獄さぞあるべし。人の口ばたの飯粒を笑はむより、まづ我が鼻毛をかへり見るべし。

異見いふ尻に尾花や白藏主

櫻の句小序

松井氏壽菴の主の、こゝに千もとの櫻を植る心や、只遊人の興を誘ふのみにあらず、おのづから精舎にたよりて佛縁をもむすばしめむとするにあり。剩四方に櫻の句を請集て、永く寶前にとどめむとす。其志なるに及て予に小序の需あり。我さく、後京極攝政殿のうたに、むかし誰かゝる櫻のたねをうゑてよしのを春の山とな

しけむと。是を以てしる、万世の後も花見む人の植にしもとのぬしを慕ふとを。

よし野には其人をしらず。こゝには其人いちぢるし。されば不朽の名をうゑるといふべし。我が短才なる、他のいふべきををしらず。只此一句を舉て、願主の勞の後の世に傳てむなしからざるを賀す。是をも小序といはゞいふべし。

今植る櫻や世々の春の雲

八橋集序

はる／＼きぬるあとの年月にはあらず。きのふはけふのむかし男ありけり。参河に序草とよばれて風雅に耽るあまり、此國に迹ふる名によりて八橋集選んと思ひわたりしが、たのむまじき世のはかなくも水行川の泡と消て、かけはてざりしうらみの捨てたしとて、二三の門人遺志をつぎたして、かく一部の功なりぬ。され

ば名をかりて容はからず。必しも御手にかけし姿にかゝはらで、只四季の表をならべて、是を八つわたせる也。是且選者の洒落なるべし。我は其澤にさく花の紫のゆかりにもあらねど、ありし世には物いひかはし、此集のあらましをもちたりものせし言の葉のつましあればと、小序を

請はる。老のまさなごとの何のはえかあらむと、辭するも辭し得ず。すゞろどを書て贈るに、猶謝していふとあり。驕馬の車にのらずばと青雲をのぞみしかしこき人のしわざには似ず、かの順禮といふものゝ行過がてにははゞからすふでとりて、かくあらたなる八橋にもはしたなく物がきつく。我只かれがたぐひならじ。もし見苦しと人の憎まば、橋守の心にまかせてけづりさらむも、よしや安かるべし。

拾扇説

人の手より得るを賜といひ、交易して得るを賒ると云。もらへば謝するの禮あり。買へば價に高下の論あり。二つのせわはなれて拾ふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはあるべき所にあれば、幸のさたには及ばず。思ひかけざるところに得るを、天の與へともいひて、人のよろこぶとなるをや。されば慾に爪長きをのこは、天もあたへぬ物を望て、くらがり子をつかみ、牛の糞に手を汚す。求ては得がたきならひ、かゝる愚人は論するに足らず。金銀を拾ふは、もに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身土破滅に及ぶもあれば、心ある人は其ぬしを尋て戻し、又は心のぬぢけ人はかくして戻さぬ不埒もあれば、其ぬしの怨をおひ、世話を拾ふ筋ともなり、災を拾ふ端とも成ぬべし。このごろ

知樂舎の主人、途に一柄の扇を拾へり。是人の落したる物ながら、其ぬしはたゞ腰を撫て、是はといひたるばかりにして、さして惜しとも妬しとも思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其畫は松竹草花にもあらず、鯉の龍門に登れる畫とぞ。されば此人の心につねに願望のかゝれるありて、天にも神にも祈る中に、此登龍門の吉兆を得たるをたのもしき物にして、歡ぶと大かたならず。むべなりや其知樂舎の号も、もとは其住るあたりの青木川の鯉によりて名づけたる謂あればならし。さるや怪みを見ても慥まざれば、其あやしき破るとぞ。よろこびを見てよろこばざり、其悦はた空しからじ。頃ば雪解て梅咲折なれば、戯てかくいひ贈る。鯉はさぞな烏賊さへのほる春の雲

五十やら六十やら、七寺の裏に八龜と名のれども、はつきと年のしれざれば、厄年もいつなりしや。有卦に入るやら、むけたやら。泥田に棒の土性か、膝皿から出る火性か、金性にてはあらざるべし。かくては年の賀も祝はれず。先生にはあるまじきとなり。いざや年を定めむと連中いひ合せて目利講をもよほし、さすり佛のごとく先生をすゑて各入札をするに、其さま、年の古びやう、所せん丁簡をやめて、くる年を生れ年とし、六十一歳本卦のかへり、みづのとの丑へ享保十八年（もう／＼是にうつておけ、しやん／＼と埒あけぬ。世はこのごろ年忘の最中に、わすれた年を定むるも定めなき世の中やと觀念して笑ひける人の、

今迄ははつきとしれぬ生れ年

戯二八龜

けふ定まるも又時節菴

三鴉集序

信濃なる駒が嶽は、名におふ富士の佛し
て、四時の雪たえず。花の名所と呼ぶ吉
野も、卯月のあらしに吹ちらされ、淀の
わたりの郭公も聲とどまらず。須磨更科
の月といへど、山にかくれてあとの闇は、
よのつねにかはるとなし。よそにはなき
雪をとどめてこそ、誠に雪の名所ともい
ふべけれ。されども歌人の目にいらす。
淺間の煙にだに立おとれる詠を惜みて、
此國に好事の三士、集作りて世に挑む
とす。集成りて題號を三鴉とはいかに。
されば古今集に三鳥の傳ありて、それは
安からぬ習なるよし。今又こゝに三鴉の
傳あり。そも此撰者三人の各羽の字を以
名とせる、いまだ其羽はいづれの鳥とも
定らざりしが、いでや今定めむとするに、
もとより異國のとはとせず、我朝にても

春ぞ秋ぞと季節あるものはむづかし。あ
るは山にかたより、水にのみ住るは不自
由なり。さらばかたよりぬ常住の物をえ
らぶに、雀の羽は仙人くさく、鷹は猛く
て寂しみなし。まして鶯のむくつけなる、
鶏は山野にわたらず、鳩は不情に、雀は
いそがし。只月にうかれて夜もすがらい
も寝ず、雪の寒きにも朝起する鴉の羽こ
そ、俳諧に借るべき物にありけれど、終
に此羽は此鳥に定りぬ。さてこそ烏羽玉
のひかりさして、此集も世にはかどやく
ならむ。是此三鳥の傳にして、我はた幸
にきくとを得たり。歌學者の三鳥は、わ
れのみしりて意地わるく人にをしへぬが
うるされば、此序に是をあらはして、
撰者のもとめにかふるとしかいふ。

笠の次手序

東羽に花雲師は、予と時をおなじうし、

好む所も同じうして、只其國のおなじか
らざる故に、つひに半面の識ともならず。
わづかに紙筆に風雅を通ずれども、それ
さへ幾重の山を隔、海を涉れば、あるは
洪喬が不埒にあふともなきにあらず。さ
れども芦垣のまぢかくて心のうとからむ
よりは、荻の葉の稀なる音信も、心のし
たしきは老を慰む友なるべし。一日假初
に晝ねのひちを曲たる漆園の胡蝶にもあ
りてたはむれしが、そこにも一顆の玉の
上に卒然として立とまりたるを、我なが
らおほけなく、物汚したる心地して夢さ
めぬ。蠅や我ならん、われや蠅ならんと
分別いまだ定らざる所に、花雲師の消息
いたりぬ。絨を披けば、さればこそ書中
にいへるとあり。師曾て掛錫の所よ、或
は其地に問訊の句どもを輯て、笠の次手
といへる一集梓行の志あり。予に其小序

をそへよとぞ。先づ名を聞てより其集の玉なるべき俳こそおしはからるれ。さるに其地には文人の輻輳する東都にもいと近し。金聲の序文は得るも易かりぬべきを、雲水遠き弊邑の老拙に請るゝとや。たとへば崑山の下に居ながら、遙の鞍馬に便して燧石を求めるがどし。實に不才のあたらざるを以て辭せむとするに、彼の思ひ合する夢あり。天已に是を定め、物已に知りて遁るまじきを諭すにこそと、只此物がたりの述て其せめに代ふ。思ふにまた其蠅のかゝる笠の次手を得て、驥尾につき千里に蹤を遺さむは、李漢が、韓文に序かきて世にしらるゝためしにも似たりと、厚顔に筆とりて雁の翅を勞するとしかり。

法樂俳諧序

聞説、むかし頼阿法師、みづから百體の

人丸の聖像をきざみて殘せしが、今も世にちりほひて、たま／＼和歌者流の家に求得れば、こよなうかしづきもてはやしけるとぞ。邇日黒田氏釜月子の手にかの一體を求出せり。黒田氏嘗て城南前津の里に別莊あり。此地に名におふ富士の高根を、こと山の間よりわづかに望めば、かねて富士見原ともいへりけり。釜月子の嚴父、過し寛延の頃は韓使の朝にきたりける時、異客の手に請ひて第一樓の三字をかゝしめ、則ち別莊の號とす。此樓の向ふ所、富士はさら也、其餘參州の猿投信州の御嶽駒が嶽まで皆一望の内にいる。南に指をうつせば、熱田鳴海灣より、すべて當國の歌枕なるもの、十にして七八を斗ふ。實に府下の第一樓なる哉。さればかの聖像をこゝに安置し、あけくれの富士にむかはしめ、石見瀧高津の松に見果し日も、ふたゝびこゝにてらさむと也。しかるに主人、つねに俳諧の連歌に遊びて和歌は專とせず。そも俳諧は連歌に出、連歌はもとより和歌の流れにして、皆伯仲の風雅なれば、枝こそわかれたれ、根はおなじ柿の本の、何ぞ白眼し給はむやと、いま一卷の俳諧をつらねて法樂に供へんとす。連衆已に定りて、予が老たるを以て小序の求あり。薄劣のあたらざるを慙て辭せんとするに、またおもへらく、實に世の諺に年役といひ若役といへる、手足を勞し働くわざは若役の請とりにして、居ながらなす業は多く老年の課役となれり。今や一坐に頭をめぐらすに、あぢきなきかな齡は吾が右に出る人なし。よしや鬚髯を染て、わかとのばらと競はむは、たとへ病衰の思ふとも叶はじ。眼鏡にしばし筆をとらむは、難きより見れば易かりぬべしと、鄙陋はみづから年に許して、こちたくも此日の序

者となんぬ。

舍整挽哥并序

今年寶曆甲申の五月、是非菴舍整身まかりぬ。舊知各追悼の句を賦し、惜み歎くもむべなる哉。年頃夜話亭に風雅を舉げ、其志厚きより、文會必此人を欠す。予もまた親しく草廬を訪はれて、句あればともに支吾を定め、吟すれば互に敲推を論ぜし、今更に往事を思へば、老涙しば／＼白鬚をうるはす。聊挽詞を諷て曰、

句ノ中所謂菴子者、生前所嗜、勸酒必爲下物ト。且石榴一株、嘗與予。今猶存庭畔。

其齡なほわかし

此わかれなんぞはからむ

面影をしたへば 曉の月枕にのこり
音信をまてば 夕の嵐笈にたえぬ

忍ぶ涙を添ふさつきあめ

歸らぬ魂を喚ぶほとゝぎす

手向の菴子 酒むなしくあり

記念の石榴 露おのづからうるはふ

仇なりやさて

怨むべしあゝ

短夜やうそと見なほす夢もなき

巴雀、木兒三吟十二表長

歌行の奥書

我が祖父野双翁、其世に季吟老人の門に學びて、吟老人及び湖春と兩吟三吟の二百韻をとめて家にあり。さるは延寶八年野双の齡四十四歳。今七十年の後是を見るに、其たのしむ心一ながらも、風躰まことに今とおなじからず。我又此道に遊ぶが故に當時尾城の兩宗匠をかたらひて、度て一卷の三吟をとむ。嗟呼又七十年の後に至らば、今のつるぎ菜刀とやならむ。さらば今の菜刀のひかりあらたまり

て、紫氣の斗邊を射るべきもいさしるべ

からず。されば子孫の古きを慕はど、是

ぞ風雅の變遷をしれと、あはせて青氈の

櫃に納めおくこになむ。

寛延三年庚午にあり。紫隱里野有四十

九齡の秋八月、知雨亭に筆をとる。



うづら衣

續編 下

焼蚊辭

おのが身ひとつは、たゞ塵ひちの幽なる物ながら、類を引群をなし、夕のせどに柱を立、軒端に雷の聲をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て汝を防ぎ、末の品に至るまで、誰か一釣の紙帳をもたざるべき。積りて世の費いくばくぞや。されば蛇の利嘴蜂の毒尾も、しひて人を害せむともせず。既に仇の逼る時、是をもて防がんとするは、人の刀鋸を帶するにひとし。汝が針は只

人の油断をうかひ、ひとり口腹のため
にむさほらんとす。たま／＼蜘蛛の巢に
つゝまれ、人の手に握られて、其針を出
すことあたはず。然れば巾着切のはさみ
には劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、
端居をこゝちよくせんとすれど、猶も透
間をうかひ憎さに、おとなけなきわざ
ながら、紙燭さして汝を驅る。ひとへに
汝が業火なれば、他をうらむ事あるべか
らず。さるにても淺ましき汝が身を觀す
れば、

火をとりに來ぬ蚊は人に焼れけり

送其常辭

浮藻の花のあふつわかれつ、さるは仕官

蟬引

三伏の日ざかりの曇さにたえがたくて、
蟬あつし松きらばやとおもふまで
と口ずさびし日數も程なく立かはりて、
や／＼秋風に其聲のへり行ほど、さすが哀
におもひかへして、

死のこれ一ッばかりは秋の蟬

賀某剃髮文

漁父が曰、柳は物に凝滞せず、よく春秋
の風にしたがふと。さるも官路にある中
は、身を清からんとては世にさからひて

人憎まれ、身を安からんとては世にへ
つらひて心に耻かし。今や浮世の譽をは
らひて二つの間に住安き人あり。

滄浪の水すめらば頭巾あらふべし

星夕賦

今宵は星の逢夜なりとて、小娘どもの慕
待かねて、帶帷子も常ならずそうぞきつ
れて、硯洗ひ、梶の葉求め、笹に短冊し、

竿に糸懸るなど、此節句斗に殊をかし
きを、いかで清少納言はあやめにしかず
とは定めけむ。人間のさゝやきは、天の

聞こと雷の如しとか。星のむつことは二
階の耳へも洩さず、天上下界のたがひめ

こそ殊にねたましけれ。ことしはまだき
秋の名の、みな月のなかばに立そめて、
けふくれ行月も影さやかに、端居の袖も
すどしきに、一人の客西瓜によりそひて、
我はた星にむかひて何の願があらん、あ

はれ此西瓜の赤くてあれかしとおもふこ
そ、さしあたりてのねがひなれといふ。

かたへの翁打わらひて、おもへばかの樂
天が、海底の魚も、天上の鳥も、高くと

も射つべく、ふかくとも釣べし、たゞあ
ひむかひて咫尺の間もはかりがたしとい

ひしは、たゞ此西瓜の事にこそありけれ。
されど織女にいのらむは、門たがへにも
やあらんとて、

赤かれと西瓜いのらむ龍田姫
とおもひかけぬ山姫をおどろかして、は
しの手向はなくてぞやみにける。

七景記

知雨亭とは嚮に其譯本ノマはへるが如く、
務觀が詩によせて靜なる心をいへり。今
又半掃庵とは、我物くさの明くれ、掃日
よりは、はかぬ日多く、床は鹿、庭は落
葉に任せがちな庵のだゞくさをいふ也

けり。名は二つにして物二つならず。され
ばこれに七景を撰ぶ。

東嶺孤月 路傍古松 蓬丘烟樹

海天歸雁 龍興寺鐘 市門曉鷄

隣舍春歌

東嶺孤月とは、嶺は三河の猿投山なり。
還き山々の夫より北につらなりて、此山
のあはひより、十月ばかりのよく晴たる
には、士峯のいたゞきもみゆる事あり。

夫かあらぬかと昔は人の疑しが、寶永の
頃かの山の焼ける時、夫とは定まりしか
と古き人のいへりけり。さればさなけ山
とは、名のをかしくて歌などにも讀べき

を、文字を猿投と書けるは少しくちをし。

たゞ万葉にぞかゝまほしけれ。されど目
には猿の名もよそならず。ほとゝぎすも
蜀魂と書、朝がほも牽牛とかけば、むく
つけきたぐひにや。清氏の女も畫にかき
ておとるものといひしが、字に書て劣る

さはなし。月は夜の長短によりて此山の南北より出て、清光ことにさはる物なし。此府下に月の名所をえらまば、此地をこそいふべかりける。

路傍古松とは、世に七本松とよべり。あるは相生めきてたてるもあり、又程へだゝりてみゆるもあり。染ぬ時雨のゆふべ、積る雪の朝、ながめことに勝れたり。草薙の御鋤のむかし語を追ひて、もしは此七ツを以て辛崎の一ツにかへむといふ人ありとも、我は更におもひかへじ。

蓬丘遠樹は則熱田の御社なり。高藏の杜は猶ちかくて、春の霞秋の嵐、此亭の南の觀、たゞ此景にとゞまる。しばらく杖を曳ば、あけの華表も木の間にみゆめり。鳴海は熱田につらなりて、松風の里夜寒の里呼繼濱星崎など、我國の歌枕は、皆此あたりにあつめたり。すべて是熱田の浦邊なれば、海づらもやゝみゆべきほど

なれども、家店にさわり森にへだちて、一望のうちにいらす。されば、

海天新雁も此あたりをいへるなりけり。龍興寺鐘は庵の東、よき程に隔たる木立一村の禪林なり。ある日客ありて物語しける折しも、此鐘のつくゝと雲よりつたふを聞て、問て曰、けふ此聲の殊に身にしめる、何ぞ然るやと。我是に答て曰、客もかの廿年の昔をしるならん。此あたりはしばし歌舞の遊里となりて、あけ暮糸竹のえむをあらそひ、月雪花もたゞ少年醉客の遊にうばゝれしが、其世は此鐘の曉ごとに別を告て、綾衣よの腸をたちけむ。世かはり事あらたまりて、今は其形だになく、蛾眉蟬鬢も今いづくんかあるや。さればつく人に心なくとも、聞人の耳にのこりて遺響を悲風に詫せるならんと。客も實と聞て、かついたみ、かつ笑ひにき。さてや、

市門の曉鶏は、此西の方あやしの小借屋といふ物軒をならべ、おのがさまの世渡り伴しけなれど、かゝればおのづから遠里小野のかばかりの聲も、事かゝぬ程に音づれ、はか／＼敷商人は來らね共、海老鯛小貝やうの物名のりて過る事も明くれなり、さればたま／＼とふ人ありて、みさかなに何よけんなど、一盃をすゝむるには、こゆるぎのいそぎありかねども、居ながら求得る日も有べし。家は是より市門へつらなれば、曉の鳥も枕につたへて、老のね覺のちからとはなれる也。隣舍の春歌は、もとよりの農家の聞なればいふにも及ばず。かのからうすのこぼ／＼となりし夕がほの隣どのは、なほゆたかなる家るにてもやありけん。こゝらはたゞ手杵の業わびしく、麥の秋稻の秋、あはれは砦の丁東にもゆづらす。是をまじへて七景とはなせりけり。さるはいと

をこがましく、遼東の冢にも似たれど、賞心は必しも山水の奇絶にもよらじ。名にしあふみの人のみるとも、おのが八所の厚味にあかは、かゝる淡薄のけしきも又めづらしきにめでゝ二たびの目をとどめざらめや。

不美庵記

經がたくみゆる世に、わびてはすむらん月をうらやみ、過にし方の戀しさには、伊勢や尾張の波をもうらやみけん。月も浪もおのれ人にうらやまれんとは思はぬを、心に物の叶はざるには、無情の物だにうらやむ世の人心なりけらし。されば身に富あまり、幸心のまゝにしては、只事毎につきて、他にうらやまれんのおもふこそ、くるしきならひなれ。我此草の庵のことそきたる、更に羨む人なければ、我また爰に事たりて、他をうらや

める心なし。人此庵を思ふにも、我他のうへを思ふにも、ともに不美の庵にして、自他の境をわくべからず。若此うらやまざるを羨む人ありとも、我はたどうらやまれんとの心にはあらず。

譲菴名文

鯉とは魚の名なり。大聖取て御子の名とし給へり。虎は獸なり。名を大藏の妓女にとらる。鯉の意よろこぶにあらず、虎はたこれを怒らんや。不美庵とは我昔しばしつき捨つる號なるを、はたして羨む人ありて、請うて其居に呼ばむとす。我が鯉と虎とにならひて、よろこぶにあらず、をしみもせず、たはぶれて是に答ふ。さかばさけつきすてし名を手鞠花

水音舎記

鈴木氏某が居、みづから名つけて水音舎

とよぶ。其よぶこと他にあらず。家に久しく傳たる翁の自畫賛あり。かの古池の蛙をかける也。あるじの祕藏ひべるかな。そもや雷霆の百里に轟くも、過れば人の耳にも残らず。此古池の水の音は、翁の耳に入て口にいづ。其音また人の耳にひびきて、正風大悟の一句なりとぞ傳へて口にいふ事やまず。耳に入口にいひ、又耳に入口にはいへども、目にかの昔をみんとする者、今深川の陳迹はたづねても、世うつり人すみかはりて、いつこか夫としる人もなし。たとへば今うつさんとするも、たえてその池なければ、いかに能藺のたくみをなせりとも、皆他の池にして此池にはあらず。さればたど是をみん物、ひとり自畫の一軸にあるべし。ア、此家の風雅を守りて、高く雲井に虹をはくは遠し。此風を望まん者誰か此水音舎をしらざるべき。

青白舎記

青白舎の名空しからじとぞ。

臺は常に青かるべし。障子行燈は白をい

とはす。清きことその内にあり。其居清

ければ、住人の心すなはち清し。あるじ

もとより風月に遊べり。口に風雅をいふ

とても、清からざれば佳句を得がたし。

昔阮籍が我まゝにして、すぐ友とすかぬ

人に二色の眼をつかひたるは、つらくせ

わるき名に立て、人又かれに白眼せざら

んや。青白さらに此名によらず。今壯年

の官路にたゝむには、友に善惡はえらむ

とも、只よく衆に交りて禮を忘れず、心

に忠を存べくば、かの霜雪のしろきをえ

て、松はいよゝ青かるべし。道なんぞ

風雅をたのまむ、風雅なんぞ道をそこな

はん。あけては金城に登って青雲の志た

わます、暮ては閑居に休て白露のさびを

たのしみ、ながく青白舎の主ならむには、

七不思議後序

和歌に西行あり、連歌に宗祇あり、俳諧

に芭蕉翁ありて、三筋二道はわかれども、

皆雲水に境界をよす。文人騷士其跡はゆ

かしむものから、殊に俳諧する人の、杖

草鞋のさびをしたひ、四方の志を專とす

るより、今や松嶋象潟をいまだ見ずと

いふ俳諧師は、世に開眼せぬ佛の如く、

抱せざる娘のごとし。されども家業に手

のひかれず、仕官に脚をほだされて、本

意をとけぬも又多し。我はた其とけぬも

のゝ一なり。布袋庵の主人は世に素封の

名をしられ、もとより風雅に富れば、身健

に年壯にして何ぞ雌伏をなすべきやと、

年々東西の旅になぐさみ、ことし又こし

の七不思議みんとおもひたてるも、此人

にして此病、さらに不思議にはあらざり

けり。さればめでたき御代に俳諧の行は

るゝことや、西行に宿をしみし江口の君

のつれなさもなく、宗祇に髭をこひし盜

賊のおそれもなし。行先ゝ同志の徒

ありて鶏黍の約をなさざれども、草履を

倒にはき、鉢の木をも蚊遣にたきて、まめ

やかにもてなし、手より手へおくらるゝ

事、紀行を見てしんぬべし。主人紀行の

稿を示すに、末に二三葉の白を餘したる

は、予に物書そへよとの設なりとぞ。さ

れど染べき一ことの葉もつゝおもひ

よらず。たゞおもふに主人の遠遊に耽る、

歸郷のけふも猶越の旅寐のこし方やをし

むらんと、句一ッ書て贈る。

拾かねん扇もこしの馴染より

贈曉吾辭

贈曉吾辭

曉吾子は、我きく公の悲歡丁と五十年、

盧生が夢の勘定さりと濟して、老を告

致仕をこふに、勤勞むなしからず、其子

に職祿をうつし給はりて、けふや衣食住

の求もいらぬ有がたき隱居とはなりぬ。

同じ穴の狐、これをよろこびていひ贈る。

菴記 應三師音書一

縉黷たる黃鳥の丘隅に止るも、止るは其

栖なり。世に雲水を追ふ僧侶の、一所不

住を事とするは、假の宿にも心とむまじ

とにや。夫だにも年老足弱らば、止る栖

なくてやは有べき。恒の栖なき時は恒の

心靜ならず。むべなり、此翁のこの菴む

すべることや。子あり姉ありて朝夕の餐

を臨れば、維摩の三万二千はしらず、安

置する物佛一たい、行灯一ツ、簞一本、茶

瓶は火燵にかくべく、硯は机に屬すべし。

臥具を納る襖あり、書籍をあぐる架あり。

膝を容るにいと安し。風雨の防、座臥の

役、いくばくの疊をか費すべき。是たゞ

姑く支那の爲にして、心は無邊の天地に

遊べば、世人はこれを狭しといふとも、

あるじは猶ひろしとぞいふなりける。

蚊屋つりてなほあまりあり草の庵

蝸牛齋頌

梢による物は風のおそれあり、土にかく

るゝ物は雨のうれひ有。かの蓮胤が車二ッ

につむといひしも、猶此ものゝ安きには

しかず。あるじはこれにならふものか。

巢でもなく穴にもあらず蝸牛

黃岡亭記

世の求る所、衣食住の三ありて、一日も

なくては叶はず。されど心をして清から

しめ、心をして靜ならしむるは、只棲る所

によれる事、かの江南の橋のたぐひあら

ざらんや。我きけり、此亭は西南に望を

ひらき、其まゝに月もたのまじ と翁の

吟を残されける伊吹の嶽は殊にしるし。

南宮の山つらなり、養老の瀧一眸に入る。

眼下は千町田かぎりなく、村落よきほど

にへたゝれば、春は雲雀の雲に啼、秋は

砧の月に音なふ。螢飛ぶ夜は欄によりて

班女が扇をわすれ、雪つもる朝は爐に坐

して清女が簾を挑て、四時の農業目をた

のしましむる外、岐山の街道もこゝによ

れば、通ふ市人の負ふ者うたひ行者、お

のがさまなり。かれはせわしき世わ

たりならんも、よそにみる目はいそがし

からず。東には岐岨川ながれて、とわた

る舟の榜の音も夜半の枕にひびくとぞ。

されば歌人の題する物、詩客の吟に入る

所、こゝにとりてあまり有。此頌人あり

て此亭に名を求、且記をもとむ。辭する

事度となれば、謂ふこと又度となりしか

れば我猶きける事あり。此居の北にめぐ

りて竹の林しけり、大なる物^{もの}様のごと
しと。是ぞ此家のときは守りて、ある
じの千代の友ならんには、かの地に是を
なぞらへて幸爾に黄岡亭とよぶ。たゞ我
聞てめにはみず、心に察して筆に寫す。
もし此言のかなふべくば、取て此亭の記
とすべし。もし此言のあたらずんば、よ
し醬瓶に蓋してやみなむ。やみねく、
重ねてわれを煩はす事なかれ。

名茶抄辭

茶抄に名を付て得させよといふ人あり。
其いふ人はわが此道によらざるをしりて
いふなれば、おもしろくおほえて、雪の
夜と書て贈る。君しるや、雪はしらく夜
は寒し。

茶にたわむ竹や雪より猶寒し

飛鳥山賦

けふはこの事かの事にさはる事あり、あ
すは飛鳥山の花みんく心に通る日數
も、や彌生の廿日あまり、尋し花は名
残なくちりて、染かはる若葉の其色とし
もなきを、春を惜む遊人は我のみにもあ
らず。爰に酒のみ、かしこにうたひて、
此夕暮に歸るさわするも、中々心ふか
きかたにおもひなざる。

ちり残る茶屋はまだあり花のもと
山下千里のまなじり、さはる物なく、ら
うくと霞わたれる田野村落の詠、えな
らず。させるをくゆらすこと暫時あり。
雲雀より田打へ遠し山のう

贈所訪不遇人一文

安達が原の閑ならずも、さしもしのびし
蓬生の隱家を、留守のすき間に見顯はさ
れたる、ねたきわざなれ。菴もりける男
の思ひがけなくて、顔は目ばかりになり

て、おどろきまどひぬらんさまも、思ひ
やるにをかしかりけり。さるもあるじの
いたらましかば、椎の葉にもるもてなし
もすべきをと、今さらいつたらんは、か
の千切木といふ猿樂狂言の心地やせん。
秋もやくれぬ。時雨のやどりはさらに
して、友おもはるゝ雪もあらざらんや。
かさねて夜うちの油斷すべからずと、茶
碗とゝのへ、させる求めて、是よりひそ
かに人待心はならひ侍り。猶菊によせて
句を残し給へる楚巾子へいひつかはす。
犬藁のはなやとがめし留守の門
芭蕉によせて句を残し給ひし芦丈子へ贈
る。

いかにとひし立枝も見えぬ梅もどき

望鑪亭記

應永田兵衛一

目に視る所にして思是に従ふとは古人の
言なりかし。されば世の人の住する所、

或は山林にむかひ江湖を望むを以て其居に誇れども、官士の上に於て此望にこゝろをとめば、いでや印を解き冠をかけばやと、世を逃尻の心も誘へし。孟母の折々借屋替も只それなり。永田氏の居宅は、城樓を望みて金鱗常に軒に輝き、朝日夕日の詠となりとて主人是を愛し、則望鱗の號を掲ぐ。愛すると誠にむべなり。官路に立、青雲の志ある眼に、常にかしき御座所を仰げば、世祿の高恩忘るゝとなく、報國の忠情日々に撓むべからず。かくて功なり名とけて後こそ、子孫に長く傳譲りて、かの山林江湖に望をうつしかへ、殘生をも安く養はめ。今は此望何かは是にしかむ。主人此記を求てゆるさず。筆にまかせて其責をふさぐ。人嗚呼なりと笑はむもよしや。請はるゝよりも笑はるゝは身に安ければなり。

訪以文二辭

以文子君にしたがひたてまつりて、木曾路の夏けしき、名におふかけ橋寐覺の詠をつくして歸國の折しも、かねてあらたに家居をまうけ、此新宅に馬をとどむ。さてもつりそめしかやの匂ひに、猶旅寐の心やせむ。今とに夏をむねとする物ずきに叶ひて、あるじの風流いかに心にくき住居ならんと、おもへばゆかしく、見ねばいよくなつかし。

生壁にまだ旅の香やほとゝぎす

嘯花詠

絃を斷、劍をかしむかしの涙袖にしたゝりて、ことしぞ身一ッの秋とは敷かれぬる。さるは梅軒の嘯花子、いまた廿に三ッを一期とし、此中秋の月をも待たで故郷の露と消ぬとつけこすにぞ、目に見えぬ

風の音におどろくはたゞよのつねにして、ひとへに鳥の翅をかゝれたる悲、たとへていはんかたなし。誰かをしまさらん。

此花子は武門の藝能他に勝れ、百事百成の器用のみか、深く蕉門の跡を慕ひ、過し頃は一日に千句の獨吟を試み、又は夏中百題の日發句をつらね、明暮風雲霜露に魂をなやまし、一たび此道の大悟せむとは常の謔なりしぞかし。我はたいかなるすくせなりけむ、斷金の交久しく、月の夜はなし雪の朗會、其人もれて我をかしからず、我かけて花子たのします。さるを一坐の口くせに、花子は天象時節のけしきを好み、我は人事の上からて、常に其とをたはぶれにくみ、たまゝ取かへたる句振有れば、是は我ながらその句をいひたり、それは我が句をそのいはれたりなど、さるがひ興じけるも、はかなく一夜の夢とはなりけるよ。思ふに

かなし。ある年はその別墅にいざなはれて、夜をかさねたる清談をなし、あるは其山かしこの寺に、すべての行樂、杖をあひ合吸筒を荷ひて、露もたがふとなかりしなからひの、此春君の御恵によりて我はおもはぬ官にうつり、いとまなきにうちまぎれて風雅の會もひまありしが、

卯月は旅の衣にぬぎかへて百里の東に別るゝ名殘、たゞにやは止むと、梅軒に半日の閑をぬすみて、かの山に花あり雪の

郭公と我を見立しに、四月になじむ菅笠の旅

といひつゝ猶我もまた、一しけり蔭そへて待て今年竹と取あえぬ辭に、たがひの無事を祝しける中にも、世のあだなる習ひもあればと、かなしく顔のうちまもられつるも、それは我身の上をこそ思ひつれ、花子はすぐれてすこやかなれば、かゝる歎を我聞かむとは思ひもかけざりしに、かくぞ定めなきとは始めて

思ひ合されぬる。されば此別のかくあやしきまでに覺ゆるも、我にはとわりと人もおもひゆるすべし。若靈魂物しるゝあらば、梁月の夢にも見えて、此手向の敵推を定めよ。嗚呼それ富士の雪は時有て消べし。此恨綿々として盡る期あるべからず。

供花 そちむけて魂まねかせむ花すゝき
社齋シヤウに泣袖もなき夜寒哉

草風詠

おとゝしの秋は此武藏のにありて、嘯花子が計晋に魂をけづり、今年もおなじ吾妻に下りて、祈るかひなき神無月に、草風子がはかなき便をきゝけるは、いかなるにや。其文披き見しには、餘りなる驚にや涙さへ落す。たゞ空をのみうち詠められしを、猶さだかに夢ならざりけりと思ひしるにぞ、ほろ／＼と袖はぬれそ

めぬる。過し秋の頃、けにいつの日なりけむ、いまだ旅立ほども定まらざりし頃、いたはりをとひ侍りけるに、其をりはたのもしく見なし、露落る萩か枝のかしらもかろけにもたけて、いでよのごろは心地も死ぬべく覺えれば、辭世の句など思ひよせたるを、かゝるともむだ骨折となりぬべきなど、うちゑみきこえしを、あなゆゝし、かばかりのなやみに、いかでさるゝのあらん、今は目にそへてぞ力つき給ふべからん、たれかれなどかたらひて、やがて一夜の伽をし侍らんなど、さしむかひたる佛の、今更に目の前をさらす。猶ものにかんじたる氣色なれば、又こそといひて立つるが、それこそ長き別れとはなれりける。我嘯花子が諫かきしほどは、かたみに袖をぬらし、さるにても世に不思議なる人の終かなと、有まじきならひの様に、おろかなる

までをしみあひけるを、間もなく又其人を、おなじむかしに見なしける、此恨みいかゞはせん。起て思ひ臥てかなしみ、空しく隣笛に腸を斷て、一句を手向るものうけれど、

誠とはまだ思はれず初しぐれ

悼鶴此文

今年の秋にあはじとは、誰れに誓ひし命なりけむ。此水無月の晦日に櫻井氏鶴此身まかりぬ。かく短夜の短かるべき端なるにや、いまだ年も廿四ばかり、月花の哀も身にしむべきほどにもあらぬを、深く風雅に心を入れて、其才の勝れたるのみか、只明暮のふるまひもまめやかに、人にもてはやされて、只此人を見ならへと、若き子持たりける親とは、異見の度とる草には引出されつるが、あはれ世にあらば蕉門にも一旗の大將とは、たしかに秀

づべき器を、かゝる夏野の露と見なせし恨、けふ御祓せぬ人の袖も、誰が泪の川浪にしはつさるべき。今は詮なきたまよばひして、牌前に一句を手向侍る。

こぬわかれあすの文月も片だより

悼八龜辭

時節庵のぬし身まかりぬ。馴むつみし年月を思へば、老涙さらに禁じがたし。我庵の巽にあたりて、其あだし野も還からねば、夕べの霧かと立のほらはかなき空を詠やりて、

蚊やりにも泣て見る野の煙かな

悼五條坊文

六へ菴に別れ、反番舎世をさりし其折々の傷はさるとながら、猶此五條坊の健なる、忍山かひなき其世の子どもをも、かたみにいひ出て老を慰むつまともなりし

を、名に呼れし辭のはかなき秋をだに待す、此水無月の露と消し。惜むべし、悲べし。松竹卒に齡を譲らず、桃李もとよりのいはず。そも我けふよりして、誰れともにかむかしを語らん。

なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

贈信州松本射山

姑山といふは、さきに宗匠某にうけたる名なりとぞ。しかるに此となへの差合と出来て、改名の字を予にもとむ。されば此名を思ふに、めでたき姑射山の字を摘てかくはいひしならむ。しからば上の一字を置かへて射山とやいはむ、下の一字をあらためて姑峯とやいはむ。いづれももとの意は失はじ。二ツに一ツを定めむは、ぬしの撰にあるべしと、筆の序にかくいふ。

おなじ山たゞ名をかへて呼子鳥

與某文

好て豪飲に耽る人あり。いかに思ひよる
とかなげん、忽八仙の仲まを遁れて、今
よりはいたく酔はじと固く誓けるが、猶
行末の亂、我ながらうしろめたし。坐右
に守るべき語を書て得させよと請。我は
もとより下戸なり。酔て面白きやらん、
止てよきやらん、其心に關はらず。され
ども其責のいと切なれば、いなびがたく
てすどろなる一句を筆す。

神もうけよ酒過さじとせし御萩

一老翁畫賛

此畫は誰をうつせるならん。しひて名を
つけてと望まる。容貌うたがふらくは、
陶氏に喩歸たり。されども例の菊なきは
いかに。嗚呼我是をしれり。東離すでに
霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる頃

か。是を更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

定茶名文

茶をあらたに製して、名をいかゞ定めむ
と我にかたらふに、とりあへず雜の一句
を筆に任せて、

茶の下をあふぐ片手は枕かな
さればたまくらともいはずや。

醉鶴亭記

こゝに吳竹の世に經たる酒肆あり。さる

は臨卽にかけむかひのわびしき店には似
るべくもあらず。又六が杉葉常盤の色深

く、碓のこだま花紅葉をうなづかせ、土
藏の白壁雪を奪ふ。其あるじ又風雅にさ

へ富ば、騷人とにこゝにたよるに、酒債
尋常行處にありといひしは、つもる行へ
の覺束なくも、毎日杖に百錢をかけて現

金買のをりこゝそ、二季の帳をも驕がせ
ず、たのもしき得意ならめ。されば暖簾

には名におふ淺野屋の風を傳ふれど、猶
一室に扁すべき號あらむとを予に求む。

卒爾に醉鶴の二字を與ふ。其意いかにと
問ふに、かの鵜鶎の姿を脱、金龜を解て

價にあてためしあれば、仙鶴を日々五
杯に酔しめて、もとよりかれが持合せの
千年の齡を、酒手にこちへとる合点也と、
且戯れ且祝して、あるじが爲に漫に筆を
採る。

秋千居記

居所に號を定てと請ふ人あり。其人もと
より名を楓夜とよぶ。楓は紅葉にて夜の
錦にかよへるにや。實それ錦をきて夜行
がどしとは、富貴にして人にしられぬを
をしむ辭とぞ。されども其榮を他に美ま
せ誇る心のある人ならばこそ、白晝に面

をさゝけて、是見よかしのふるまひもす
べけれ。身に徳あり家富まば、いかにか
くろへたらんとも、世におのづからかく
れなかるべし。さてこそ錦着て綱をうへ
にすとのかしこきをしへもある物を。我
は只其夜の錦こそ床しけれ。物必^{かな}尤^なか
らぬは長久の端なるをや。されば夜の楓
の限りなき世々を祝して、千秋の二字に
定めむとするに、其唱古くしてめづらし
からず。此字を上下と置かふるにも、心
おなじくして呼ぶ所聊あたらし。終に秋
千居の三字を題して、此主の求にかふる
としかり。

也有翁の著述のふみ、鶉ころもにつきぬとおもひつるに、猶かゝるめでたき錦繡のかどやける衣ぞのこりたりける。いでや、さかさまに着し朝服より、葛巾山服の老の末まで、さる斑爛のいろにほこらず、てゝらふたのゝいやしきですてず。常談俗語にこゝろをやりに常のすさみとせられしは、はづきにさらすほしぎぬの、すぐれてたかきこゝろとぞしられたる。あはれ六徳そなへし君子にておはしけるを、十徳きたる誹諧子とのみおもふめるは、ばくものをのみにふれし、ふるぎの市のふみちがへなりけり。そもくこのふみは、なごやなる垂穂ぬしの簞笥のそこにかくしおかれしさいでなるを、袖おほくびととりならべて、終にたけある衣とはなしつとぞ。かゝるみけしにおのれらが墨つくべくもおほえざれど、ふるきとくいのはるゝまゝに、此はたそでをかいけがすも、じちにかり着のまへしりへ、身にあひがたきことになむ。

衣
物
の
ま
ま



宇都良衣

拾遺 上

壽亭記

むべなり、此亭にことぶきの名ある事。

門に万里の湖を通じて、千艘の出入あし
た、一葉の行かふ夕、枕によりて閑を求
れば、軒端になれて伴ふ鶴あり。酒をと
とのへて肴をよべば、俎板に生てはたら
く鯛あり。さるは所の仙境に似て、漁村
に近き自由なるべし。ましてやごとなき
蘭の葉、桂の棒もこゝにうかぶ日は、枝
も榮ゆるとうたひつれたる松風の里の松
風も、濱の名にしおふ君が千年をや呼続

ぬらん。もとより熱田鴻達が嶋もはひわ
たるばかりかしこき神のめぐみはさらに
して、塵外の佳觀にあそべば、世にあり
ふれたる溫飽齋麥切も、爰に不老の藥と
なりて、ことさらに壽の一字の偽ならぬ
ことわりをしるべしと也。

松に鶴さて新そばに雁の聲

須磨硯記

藤二加賀島氏之壽一

連城の珠は其徳を名とし、小島の劍は來
るいはれをしらせ、蟬折の笛はそのかた
ちの似たるをいふならん。それが中に此
硯をあるじの須磨とよべる事は、此海の
際に櫻の花を彫なせるが、名におふ若木
の俤ありと也。けにおもしろし。此浦は

ひかし平家の陣をとりては、ものゝふの
譽をあらそひ、又は源氏のかりのうつろ
ひに、艶なる物語のあはれもそひて、武
になつかしく文にゆかしきを、まして其
六十帖も此巻より筆はたてそめて、もと
末もとゝのほりぬとか。其人の名の紫な
るに此石の紫なる、それも捨がたきゆか
りなるべし。さればあるじのつれづれの
すさびに、みづから妙觀が刀をもて、これ
に覆へる物つくり、猶我一語をそへよ
といふに、そのいふ人もいはるゝ我も、
今年は吾婦に旅客となりて、ともに故郷
戀しきすさびに、美しくもかへる波かな
と、此須磨の海の名にひかれて、つひに
此記のぬしに成ぬ。いざや浦のみるめも
はづかしけれど、よしあまの子のはかな
きしわざと、其關守もとがめざるべし。
する墨や明くれ須磨の花ぐもり

鴉 箴

孝は百行のもとこそきくに、かれは反哺の孝心はありながら、いかで啼聲をさへ不祥の物にまよふまれば。夫も夕ぐれに端居に泊がらすの三、四つれたるは、清少納言もあはれとはみしを、まだ曉の鐘もならぬに、月夜あるきに起さわきて、常に廊の夢をやぶり、かの楓橋の欒枕に唐人の寐言をも驚しぬ。これらは人にかこたれながら、かへつて風雅の種となりて、烏丸殿の歌にもよまれべきが、田畑にむらがりては、麥をはぜり大根をつまき、曾哲が隱居屋のなつめも、栗栖野の秘藏の柑子も、などいたづらにあらしけむ。然るに古きためしには、かの烏羽玉も汝が寶にて、名劍に小鳥あり、おふけなくも日輪に三足のからすもおはしませば、さのみさがなき物ともおもひくたさ

れす。されば一たび己を顧て、鵲の眞似をする僧上をやめ、鸞を烏の無理をたしなみ、烏麥烏瓜の備はりたる食もあれば、身を墨染の善心に發起して、今かくいへるしめしをも、よくあゝと打うなづかば、あなかうからすのら烏うかれがらすの浮名もきえて、長くお烏大明神のめぐみかうむるべし。さらば鳴子の枝もならさず、栗山子も弓を袋の世となりてん。ア、人の爲におそるべし、身のために慎むべし。

送暖氣神表

于時在武州

今年秋の初かぜ身にしみわたるより、老となく若きとなく疫氣になやみて、清涕の露草葉を爭ひ、穂薄のかしらふらつきて、喰物の味をいさしら河のそれならずも、とめがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひまより煎藥のかほりほのもる

るより、下はあやしの柴ふ(こゝ)るまでも、かしらをかからけすといふ事なし。芝居入なうして、盆狂言の櫓幕いたづらにしほり上、色里客たえて、夜見世の行燈かゝぐるによしなし。葛西の瓜畑も下冷に守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれゝて、水馴竿の細元でを流す。祈禱の法師も長髪に忍辱の姿を失ひ、(五)貴禰も祝詞の聲うらがれたり。醫者賣藥の門のみ賑ひて、きのふ刺の匕先も正氣散にやすむひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄の療治ならねば、はかゞ敷藥代もよらまじ。噫此秋、いかなればかゝる災を下して吏民にくるしみをかけ給ふぞ。願くば天神地祇愛愍の眸をめぐらして、暖氣の邪神を速に西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帛のむづかしきわざはしらずとも、笹の葉にして切かけ、太鼓をならして及ばずながら

ちからを合せ奉るべしと、丹誠を抽て告
奉る微志を、それみそなはし給へ。

菊合賦

與成田某

此あるじの菊作るにすける、すかすば誠
にかくあらまじや。されば作るべき花の、
これならで何ならん。白は吉野の雲をな
びかせ、黄は玉川の露をあらそふ。ある
は二月の紅にまさり、あるは八橋の紫を
うばひて、詩客の車も停むべし。昔をと
この袖もぬれなん。淺深濃淡の色はさら
也、花形は百種の新奇を咲て、年々に其
目をおどろかし、國々に其名を聞ゆ。む
かし陶氏が菊に名立るは、只有のまゝの
色香にとどまりて、あるじのためにはい
ふべくもあらず。春の雨に鉢を入ては、
栽るに臺陀が手をくだき、秋の霜に簪を
あてゝ、渦むに佐國が心をなやます。む
くつけき土大根だに恩をしる心あれば、

まして年月の愛をかさねて、いかでか此
宿の千年を守らざらん。いでや世に此花
ありとも、此人あらずばこの色にさか
じ。さらば此人ありとも、此花ならずば
此色にさかじ。あるじや此あるじならん、
菊や此あるじならんといふに、あるじは
其譽を菊にゆづり、きくは其功を主護
りて、この挨拶の果しなくば、世にいふ
水懸論にして、秋やむなし暮ぬらん。
いざ我判者せんといふに、物定のはかせ
にはあらねど、只賦つくりて其日の笑と
はなせりける。

蝶々も土ふまぬ日やきく合

雪見賦

月華は其へだてなきを、雪見はひたぶる
に下戸ならぬ物好ならん。さるは香爐峯
に簾を捲き、こたつに目ばかり出したる、
それも雪見とはいはいふべけれど、我門

には是をとらず。いざころぶまでとなが
めし草鞋の跡を尋ねて、白妙なる夜の目
もをかしからんと、たれかれの無差別づ
れ、いづこはあれど例の新地にぞ人は起
居たらんと、南頭にあゆませいづるに、
町はねぶかの所々かはりて、酒屋温純の
行燈にこそ、まづは目とどまる夜のさま
なれ。廊の門にさしかゝれば、おなじ心
のうかれ人も見えず。月は師走の空すさ
まじくさえわたたりて、はえあひたる雪も、
さすがによそよりは身にしむ心地して、
過し年武陽の其里にて、誰送られし下駄
の跡と朝霜を詠捨しふること、今我なが
らなつかしく、ふと打すんじたるに、見も
しらぬをのこの頭巾まぶかくあたゝかけ
に、木綿羽織にふくだみたるが、行過が
てに耳ともきゝとどめて、ゆに此心ば
への淺からず面白くさぶらふと、打かへ
し吟じて、むかし伊勢の富倉屋とかいへ

るに住ける女の、なじみの客の別を見送
りて、雪のあしたに立つくして、初雪や
わがふところのさむる迄と口ずさびし
をそ思ひ出侍る。今こゝらにも、さる情
しれる女こそいはね、口をしくこそと、
なれ／＼しけに語りて、やがて立別れぬ。
いかなるものなりけん、名もとはず。さ
ては今宵いづ方にてか酒一ツくまんとい
ふに、秦皇の雨ならずも、雪に立よらば
松尾の名もをかしと、つひに此門に下駄
の齒をたゞきて、

面白の雪の蹴あけや小挑灯

旅論

俳諧は人々笠草鞋の情を専にして、旅情
をしらぬ人は風雅もいととほしくや。か
はゆき子に旅をさせよとは、風雅に魂入
よとの金言にぞ覺え侍る。誠に花鳥月雪
は、うちあるさまにも有ぬべし。戀と旅

とに深き哀はしるならひを、我十六の春
やらん、始て伊勢に詣て、わづかに六
日ばかりの旅行をなせり。其頃風雅もか
つてしらず、今のおもひ出とするにたら
ず。是より十とせの今にいたり、たゞ官
路にのみ往來して、さらに旅だつ事なし。
しかるに、川風寒み千鳥なく也の歌を唱
れば、六月の晝中也寒く覺ゆると古人も
いへりける。けにや妙句を吟すれば其境
の思はれ、其境を思へば新句を得る。干
瓜や汐のひかたの捨小舟 とはいともか
しこき

御製なり。此捨小舟、玉敷の庭にある事を
きかす。たゞあやしいかげきの箱といふものにい
れて、葭垣の南うけ、又は井戸屋形の端
にさし置たるをこそみれ。さるを、
御製のめでたきをおもへば、目にみると、
こゝろにしるの二、ならざるいはれなら
ずや。其雲のうへにこちたぐもたぐふる

にあらねど、わが旅情の十が一ツもくみ
しるは、風雅の門を覗くによれり。抑明
日の足をたばひて、くたびれぬさきに馬
にたより、聞けんこの相詞をもて、行過
がてに駕のねをなし、物をおとさず、草
鞋をぬがさず、茶屋の縁と泊の下女にも
しこなして物いひたるさま、初心の者の
うらやましと思へるばかり、旅になれた
るわざならん。旅を家とし、千里を勝に
かけたる者は、晝休の店に御歸うても、
やがていびきはかくなれ。只年わかき初
たびこそ、其きは物も手につかず。無
用の襪きせるに物ずきを盡し、笠草鞋も
十日以前より鼻の先に掛置て、船川の説
法きかじと、伯父の見舞に出違ひてそは
つきあへるは、駒の朝はやり也。さるを
故郷の旅とおもへば、さすがに節分の豆、
早船の守とさわがれて、少しは心の覺束
なき方もあらん。出立は茶漬にはしらか

し、菅笠の緒の取りそぎたるも、さすがに堺川越る時心細く見かへるは、父母の國をなると誠也。案のどくあゆみつかれては泊を待かね、わらぢの緒はときたれど、揚りはなに兩手をつき、やゝひざがらしらにて道あがり、居風呂によびたてらるゝも中々物うきばかりにて、桶に手をかけぬれども、縁のいと高くおほえて、横ざまにまろびこみたれば、四方はせばくて肩はすほめたり。折釘に物かけるなど、つれのをとこに氣を付られ、財布の置所に迷ふ。あるは名物の小刀、仕出しの煙草入寶、ねぶたき耳にかしがましくて、木枕に横たわりてぞ一日のたのしみはおほえぬ。心よき夢は七ツの鐘にゆすられ、起出る床のうさは戀の別にもまさりぬべし。鶏の聲もなきわたり、馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はわかるれど、目は猶さめかねて追分の並

松にだきつき、出はなれの橋につまづく。道端の家に松葉ばちくんと打くべて、茶の匂ひかうばしきは、浦山しく心とまるわさなるべし。安倍川の餅は山吹の面影ありて清らかに、岩淵の小豆餅はふじの覺束なきに似よらで、いとむくつけ也。大根漬は喰次第として、すべて五錢の定め、酒の直は茶碗に極置で、口のかけたるを置はいとさもしきを、其缺口に親指をあてゐるは、ともにぬからぬ才覺なりけり。出女の上は木導が説につくしぬ。御油赤坂ははでにて名高く、吉田濱松は地味にして艶くし。足袋鼻紙の商ひは譯の相紋としるべし。赤前垂紺前だれは所の風にもよらん。片輪車の染入も、引には廻るならひにて、旅客のうさを慰さむ便とはなれり。かりの契もなほざりならず、草鞋のふしに心をつけ、くみ茶に情をはこぶなど、さすがに涙もよほす人もありなん。五十三次はさら也、邊土の旅に猶うき事はあるとしるべし。木賃の宿といふせくて、行水の湯は鍋にてわかつ。片破月の盞をしたれば、藁火の灰飯にまじはりて、喰べくもおほえず。さらでも蚊屋は破れたるを、赤子せわりて夢も結ばず。向ひの土臼のうたはおさまりて、隣の女夫いさかひを聞、ふすまは引立ては、軀かゝぬ男に駕かゝれ、戻り馬にれど、おくび形にあきたるなど、足つかれては、軀かゝぬ男に駕かゝれ、戻り馬にまたがれば、新鞍に腰骨をいたむ。うき目つらき目則風雅の種にして、言につきず、思ふに限なからべし。あるはいかつの乗合に興をうしなひ、馬やろの聲は魂を消す。雨の夕は殊に悲しく、月の曉はいつもねぶたし。我かくしりて一座旅情の附合に及ぶ時、眼をふさぎて爰に來往すれば、筒(箇)のうち新規無量の事あり。

たとへば今世の軍者としるべし。つひに軍はせざれど、かけ引備立の師となりて人をも教ふるは、あつばれ軍者也。我又門を出すといへども、心をこゝに用時は、則千里の旅客としるべし。此一段は、われ廿七歳にて書つけぬ。行末いかなる旅をして猶奥深き限はしるとも、此論は一字をかへじ。蓋風雅の居ながら物情に亘るの謂を、後見ん人にしらせんとなり。

馬かたの寐たあともありつく／＼し月ひとつはしや／＼とたび乞食我紋の夜着にあふたる旅寐哉出女の口に蚊のよるくもりかな

賀小女辭

婦に三従の道あるや、其家に在て親にしがふも、父母まめにして揃へばなり。嫁して夫に従ふも、中の睦まじければ也。老て子に従ふも、よき子をもてば也。物

の三つ揃ふは稀にして有がたし。鼎の脚も三つ揃へばこそかたぶかね。宮地氏の家に娘を持ち。子の年子の月子の日に生れたりとぞ。願うてなり難く、求ても得まじきふしぎなるをや。子はも十二の始にありて、しかも大黒天のつかはしめ、打出の小槌おもふまゝなる行末の幸を賀して、宮地氏に贈る。これ其求なればならし。

花も何みねにみどりの姫小松

峰は三字の
讀語也。

組花生蔵

見ぬ國の上戸が、我飲死たらん所に埋よと、其具を常に荷はせてありきたるとか。けふもわするな、あすも忘るなと、調市にせわやきて、祝言ふるまひの門へも持て立せたらん。物いまひする人はさぞ惡み嫌らむ。これらは組に赤烏帽子なが

ら、わる物すきとはいふべからん。我せどに古き組あり。久しく久三が手にも捨てられて、今は玉が齒黒壺にも沈むべき身の果なるを、取上て閑居の花生となしぬ。組よ／＼示て云、

幾春庭の土をかへして

もえ出る草の根は斷つらめ

今より過し罪を悔まば

いけおく花のよはひまもれ

杓子銘

或人杓子を床の筋物に物
すきして此銘をもとむ。

爰に千早振お多賀杓子ありて、用ひざれば鼠と遊びて味噌桶の陰にかくれ、用ひられては虎の勢ありて床のうへにものほらんとす。さるを杓も摺小木も同じ幸を眞似んと思へる、これを世のたとへにして、杓子定規とはいふなりけり。

千竿亭記

藤三條氏之第一

亭に名づくるに千竿を以てする、君きらふ事なけれ。竹は古人のとりくゝに愛して、友には今更ふるめかしきも、物は年々

にふりゆき、姿は日々にあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはゞ、句は此君の空心にもとむべく、てにははふしゝのほどよからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折々の風になびきて、爰に東坡も七賢も、いざしらぬ趣ありといふべし。身はよし鋤冠の仕途におきて、理窟の塵にまじはるとも、纔に半日の閑を得る時は、是を五湖の舟棹とも詠め、富春の釣竿ともなし、あるひは竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老をもまねびて、俳諧自在の遊をされるより、千竿の名のむなしからずば、よもつきじく、万代までの竹のやどりと、名におふ鳥も此枝をたのみて、ゆかしき軒端なるべし。猶思ふに此亭の朝風さやぐ春も有べく、雪に

をかきき夕もあるべけれど、我はたゞ郭公の告るを待て、笛のさかりをこそ問へけれど、たはぶれて筆をとどめぬ。

野遊集序

應三川合稿

仁者の山をも逐はず、智者の水をもしたはずして、今年野遊をおもひ立てるは、むべなり武藏野の騷客なればならし。そも歌よむ人のいへるは、其道を濱の眞砂とは、盡ぬたとへはさもありぬべし。おなじものゝいづも白からんは、目まぎろしき方のいかゞはあるべき。そこを正風の俳諧にいはゞ、同じ野の草ながら、みどりにもえ、錦にそめて、古き物は古き儘にして、其日其時に新しき、此野に心を遊ばしめば、たねはよし武藏野の、是もつきしなき言の葉なるべし。

寐物語後序

應三安田氏之稿

は、瀾橋に厄を擧て陽關の曲を謡ひ、八橋に餉をひらきてから衣の歌よみしも、同じ旅の露けさながら、それはみぬ國の花鳥をかしからず、是はやまことばにさへられて、にけなきわざはいひもらすふしゝも多かるべし。むかしわが翁、川わたの捨子に物なけくはせ、芋あらふ女をも詠すてざりしより、世に其風を學ぶ人多くは杖笠の姿情をしたひ、紀行まことに牛に汗すべし。それが中にも此一軸の殊に縦横自在をえて、あるは猿渡の舟に無常を觀じ、志津が嶽に忠義をしたふ。小谷の城の跡をとへば、物おほえよき男出きたりて、昔がたりに竹杖も朽しつべく、今庄の驛に宿をかれば、笑上手の女ありて酒あひに草鞋の疲れをわする。たのしみかなしみ見るうちに行かふ中に、かの金津の里には、いとなまめいたる女はらからすみて、そこの旅ねの枕にぞ、

常盤の山の岩つゝじ、わすれがたきくろへごと、おもひやるにねたかりぬべし。さるを此作者は蕉門の俳士とこそ聞に、千万言のうちに、などや一句の吟もなし。是や無絃の琴を撫たる、誠に琴道の尋常ならず。音立る調にも勝れる事を、ひそかに此雜物語に聞侍る。

贈五條房二書贊

小松殿の教訓は琵琶法師の曲に残りて、聞人惑を起し、白藏主が異見は大藏和泉が家に傳えて、見る者笑を催す。誠のあらとあらざる成べし。我筆すさびのざれ書ながらも、やう過たらんは正風にやたがふべきと、深切の一棒に始て目悟ておもふに、誠に是よりいくばくの謗をか遁るべき。我爲には千金にもかふまじき賜なるをや。是を贈りて是を謝す。願くば五條坊に納て、昨非を改むるしるしと見

給へと也。

こゝろある人の垣ゆふ野菊かな

蛙歌

蛙、すみよしの浦のみるめのかりならぬ、古今の序にのこされて其徳のたかきや。

かはづ、廬山の雨のつれづれに、詩人も鼓吹とほめおきて、その聲のたえなるや。

蛙、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐て、そのわざのあやしきや。

かはづ、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、其名の世々に聞えたるや。

かはづ、朱雀の小田に啼つれて、逢夜わかれの曉に、嬉し悲しうたはるゝ、其哀のわりなきや。

かはづ、深川の古池にさびしき音を

きかせて、おきなゆめをましたる、其功のうへなきや。

夢人記

旅の住るは殊にすきまがちなる、木がらしの窓さしかためて、今宵は世務の妨なれば、ありし猪の子の餘波とて、人のえさせたるもちる煎させなど、其間のすさびに大根引の發句せむと、例の集ども取ちらすに、猿蓑の時雨も折からの軒に音なふ。まして炭俵の其夜の切火桶も、この頃にやとゆかしければ、これらを枕として思ひ寐の夢なりけり。忽然と人ありて、世々の誹諧の變化などかたる。其辭懸河の如し。さて我いはく、今案する所の大根引は、はじめて祖翁の季を定めて、古人のしらぬ題なれば、こゝろみにこれを以てとはむ。季吟老人世にありて、其時此句を求めんとせばいかに。夢人言下

に吟じてはいく、

暮るまでやすますひくや大根機

増山井段連珠の趣もこれ也。根機つよき

といふ秀句を思ひよりて、あとはそれに叶はせたる迄なり。其後宗因に變化してはいかに、

大根引あと黒波とぞなりにける

黒の一字をあたらしみにして、諺の詞を用ひたる、これらや談林にあらずといはざるべし。いでや元祿の頃正風世にひられて、其門人三千の徒すべて是に徳化せられたれど、猶おのがじゝこのむ所にひかれて、風体のくせはわかるべし。晋其角は作にひかれて、其枝其葉にいたりては、墨子が歎きし白糸も、本の色なくむすはゝれて、とけがたきなぞゝなるべし。強てそのかたはしを求めば、

今ぞ小春見よ大ぬさの大根畑
かくもいふべくや。引手あまたの詞をか

くして、其餘は風流をかざる。さてや許六がこのむ所はいかに、

手の甲で鼻ぬぐひけり大根引
惟然坊が手筋はいかに、

大根引から出ひても哀なぞ

露川が身のなる果はいかに、

繼母やたぶさ颯んで大根引

さまゝの風格は得てきゝぬ。さらに我をたすけて正風不偏の一句を得させよと乞うに、笑てこたへす。いざやゝとせむる内に、無下にゆりおこされ、驚て打寐がへれば、例の折敷をつきすゑたり。誠や五十年の變化をみしも、思へば栗餅のにゆる間にてぞありける。

悼反舊舍文

無常の風のおどろかすは、めに見えぬ秋をしも待さりけり。此水無月の十八日に、便の人につけて、過し頃より寝のなやま

しく、うちこもり侍れば、久しくおとなひ侍らず、いぶかしとやおもふらんとときこえしに、筆の跡も例のこまやかに、物うけにもみえねば、たゞ此曇さの故にやあらん、庭に秋草の秋まぢかねて咲出るもあれば、是折て便せんと、さしもいそがぬ心に、其日又の日と暮し侍るを、あくあしたの露と消べしとは、いかにおもひかくべき。世はたゞ夢としりながら、かゝる夢もならはざりけり。吉田法師がいひけんまゝ子立の石も、一ッうせ二ッうせて、今は尾城に蕉門の一老となれば、名望四方に高かりしが、年も古稀には猶三ッばかりもたらすや。吟行いまだ杖にもよらず、机に眼鏡も忘がちなれば、行末遠くたのみし人とのいかに翹もがれたる嘆すらんと、我にてよそもおもひしられぬ。夜話^{本ノマ}てう、くたすばかりの袖いかにと、かの庭の草どもを季札がむかしに手

折て、あすの七日をぞとひ侍りける。

虫はまだ人になかせて夏の草

贈巴水辭

廿五年の勤勞めでたく功なりて、今や耳目肺腸わが物にもらひかへして、みづからの世帯をいとなむ。かゝる身において、はじめにその心あらざる物なく、巴水がごとく終をよくするは世に多からず。

鶯や籠をいでゝ竹に巢ごしらへ

某別墅記

あしたに劍を佩て營中にひざを屈し、ゆふべにはゆふつけ鳥のそら音ははからねば、理窟の關の戸をのがれて此閑居に耳をあらふ。そのあるじは茶をこのめども、茶人ならねば利休が寸法にもほだされず。下戸なれども酒をにくまず。しかも淵明が風流をしたふ。さてこそ所も柳町

の、その五株のゆかりなるべきにや。みよしのゝ山のあなたに宿もがなとは何をとおもひのすてこと葉ぞや。靜なる望はさも有べきが、雪の朝に豆腐賣もこす、つきの夕は酒をも佗らむを。たゞ此幽栖のあやしくも市の中にありて、さらに車馬の喧をきかず。塩も油も求るにやすく、溫鈍蕎麥切にも自由をえたり。庭は僅の間地ながら、北に一重の窓をひらけば、千町の田づら軒よりつゞきて、田がへす春は蛙の聲近く、詩家の鼓吹を木枕に聞、早苗とる頃は鶯のとびちがひて重胤が夜なべにとほしからず。まして稻葉の雲も色づけば、雁わたり虫啼て、ひとりぞ月はみるべかりける、と寂し好のかの法師も心とむべき住居なるを、冬はことさらに山くの雪を、剡溪に棹をもささず、佐野のわたりに袖もはらはす、火爐に目ばかり出せる詠は、昔王維が輞川（わんせん）の別墅

も、この物すきはいさしらざるべし。頃は長月なりけり。うらなき舊友みたりよたり爰に招かれて、酒のみ茶客事ありしが、折しも十五夜の月とよく晴たるに、此興は忘がたしなどうかれさわぎ、裏なる柴折戸開て稻葉の露にそほち遊し序、あるじ此記を記してよと求む。莫逆の間に辭する事を忘れて、かたはらいたき筆とる事にはなりぬ。あなかしこ、知己ならぬ世の人になもらし給ひそ。

又とはむ菊より後の根ぶか畑

吾樂菴記

應二松雨稿一

獨樂園のぬしは、みづから其記を書いて人に其樂をしらしめ、吾樂庵のあるじは、我に其記を求て其樂をかたらず。我こちたくも君にさとさむ。世にたのしみのおのがさまぐながら、樂を求て樂とするものは、哀情これが爲に先だつ。まだき

秋風のはやうよりいひしろひて、今年は珍らしき月見せむと催せば、巫山の雲心なく立さわぎて、夕の雨吟魂をなやまし、其日彼の日は興ある花見せんとさわげば、祈らぬ山おろしはけしく吹て、賞心霞にへだち安し。況娼榭舞筵のたのしみにおける、まして世務仕官の上においてをや。芦分船のさはりがちにて、難波に恨のはれまなからん。さるはたのしみを求てかなしみを求むともいふべし。さればこゝの境にありて、世に平生のたのしみをしらぬ人は、夕にたのしみて朝にたのしみます。よく樂をしる人は、何か心のたのしまざらん。もし此樂に乏しからずば、誠に吾樂庵のあるじなるべし。

月花の富や心の藏の數

桃花石記

一日木全もくぜんきたり、告て曰。或人の家の藪

に色異なる石のうづもれてある事久し。或は人是を怪めども、わづかに半面をあらはして、出す事いとやすからねば、さてやみぬとぞ。さるを頃日其友烏賣なる者深く望みて、あるじに受得、とかくして堀出せり。是を石工に見するに、驚て曰。此名を桃花石とよぶ。むかし津の國の御影村勝原村より出し、其性至て硬し。物に用ゆるに最上とす。然るに今其もとより絶て出す事なし。世に稀にして人知ず。最珍とすべしと。其ぬしよろこびて是を彫しめ、手水を湛ふる具となせり。翁これが爲に記を書む事を乞。予曰。誠に既に盛せり、其外に何をいひてか記を作らん、只其人にかく傳へよと。木全猶こふてやまず。予重ねて云、むかし三人の僧あり、ともに不言の行を約す。既にして一人の僧誤て言を發す。一僧驚きあわて云、何ぞ誓を敗りて物いひしや

と。殘の僧かへりみていはく、二人は既に行をやぶる。今守る者は我一人なりと。此卒に三僧の行、ともにやぶれりとぞ。此僧の例をおもへば、いはずといふもの即いふなる時は、我記を作らずといふも亦即記を作るといふものならんをや。是を以かの石にとへ。名にしおふ桃花ものいはぬも、蹊をなすはいふに似たり。石も又うなづきたるためしあるをと、笑て卒に是を記とす。

定齋號一序

大井氏瓦光子は、武門に生れて其家の技に拙からず。されど脚に憊る所ありて駈走に健ならず。かくては弓箭も取がたしとて、すつべき物はとよみけん藥師寺が心をしりて、五斗の米の望をたち、三石の奈良茶を甘なひ、常に蕉門の月花に遊ぶ。さりとて熊谷が無常を觀じ、瀧口

が戀にも懲りねば、髪をもそらず、法衣もまとはず。猶長羽織に大脇差、野中の清水のむかしをのこせば、心しらぬ人にこはがらるゝもをかし。靜なる事に好キならひたる事ありて、つれづれの手すさびがてら、今のたつきとも成から、市中に藥をうらす、二頃^{ふたぎほ}の田に足もよこさず。朝三暮四に餘りあれば、かの塞翁が馬のためし、幸や不幸ならん、不幸や幸ならむ。世に誇る人はいさ、うらやむ人の多きをみるべし。此ごろ茶話の餘、我に齋號を定てよとこはる。口にまかせて自全齋と名づく。其心あるにあらず。なきかといはゞ、なきにしもあらじ。(以下脱文あるが如し)

名亭説

青木川^{あおきがは}の滯^{とど}にすむ人の、其居に號あらん事を望む。かの川はもとより理の多くす

む所とこそきけ。爰に此人の逍遙せば、魚の樂をよくしるなるべし。されば魚ならずして魚の樂をいかでかしらんと難ぜし人は、はた其知る人のしることをも、其人ならねばしらじとぞ。今此人の知る事をするも、我ならずして何ぞしらんやと、笑て卒に知樂舎と書て贈る。

見えずくや魚のこゝろも水の月

宜白亭記

■三山村氏之書一

見て是をいはむとする時は、詞の及ばざる事をくるしみ、見ずしていはんとする者は、心のおよばざらん事を恐る。我聞、此亭は領主の閑に耽る所にして、謝氏が腹を勞する事二町許、脩竹深樹の間をひらきて、登臨亦たぐひなしとか。けに兼好も、此麻衣の木曾にぞまづとて、靜なる方は求しをや。されば領主反喬舎にさゝやき合て、いざや此亭にさせる名なし、

試に予以記をこひて、是か名もそれによらむとたくむ事あり。名を聞てこそ佛もおしはかるるれ、名はこれが後ならんぞことにかたきわざなめりとむつかれど、此ごろそゝのかさるゝ事いと切也。爰に風雅の天眼通なからんやと、潜に此事をはかるに、嶺の尾上の花によろしく、月によろしくより夏によろしく、名におふ駒が嶽にむかつて、雪に又よろしからざらんや。眼下一條の谷川流れて、岩にくだけてちる浪も、心の塵を洗ふによろしく、持て贈るにたえずといひし雲心なくて吟魂を助くるによろし。かれといひ是といひ、此亭に宜からむと、宜白の二字を名として贈る。もし宜からずといはい、白は物の下地にして、染ればそまる色なるからに、他の宜しきに染かふべしと、爰に云拔々の詞をまうけて實をのがるゝ物ならし。

宇都良衣

拾遺中

岐路紀行

延享二年

乙丑のことし、君にしたがひ奉りて、
卯月六日江戸を出て尾陽にのほる。一年
を悉く歸國のけふを待えたるよろこ
び、人々も賀しあへるに、

卯花の中にうからぬ首途かな
年々になじみし武府の人々には、淺から
や名残をしまるゝもありて、さすがにこ
ころひかるゝ別とりなり。

麥の穂の穂もぬれてわかれかな
今年は木曾の山路を分る也けり。仕官の

身のならばし、こゝろならず馬鎗のいか
めしくさどめきつれたる、野老村童に事

間まほしきも、物いひかはさんはにけな
きやうなれば、店の餅酒は見ぬ顔して過
侍る。まことに風雅の本意ならぬもいか

がはせむ。こゝの山はとありて、かしこ
の川はかくありてと書付たらん、その所
みぬ人はさもおほえぬ物にて、殊に筆の

ひよれる句ども少し筆にとむるのみ。
蕨といへる所に、とばかり畫けとゝのへ
て出づ。

我とむる手もなき夏のわらび哉
此夜上尾に泊る。

七日

熊谷寺に直實が像などあるよし。みちの
あはたしくて立よらず。

熊谷もはては坊主やけしの花
今夜本庄に泊る。

八日

かくいへる所にて、

くらが野ときけばや里も木下闇
けふは過る道すがら、家々の軒に藤をさ
し侍り、花をもさし、葉をもさせり。所
の人にきけば、佛生會の手向也と云。故
郷にて見馴ぬ事也。みちの國に花かつみ
ふくたぐひにやとめづらし。

灌佛もやがてはへとて藤の花
此夜板鼻にとまる。

九日

碓氷峠を越侍る。般若石といへる峻嶒を
すぎてより、さのみけはしからねば歩行
にて行。山谷の桃櫻は夏としもなく、木
のめなど打けぶるやうなるもあり。けふ

御前に出たるに、いかにや、山はいまだ

衣かふべき時節ともなし。花なども春の

こゝちするに、例のくちすさぶ事も有べ

し。此心おもひよれるや、との給はする

に、いざ道のくるしうひひて、むけに申出

る事もゆはずと、御いらへ申に、さりと

こゝにはあるべき物をとて笑はせ給ふ。

綿入を木曾路の夏や花の旅

難の見ぬ山路の桃は四月かな

などさまぐに句をつくりみるに、よく

もあらねば、

御前に啓する事もなくてやみぬ。

追分にとまる。

宿の軒端に淺間山ま近くみえて、けふは

晴たる空に、ことに煙のまがふ方なく立

登るさまめづらし。此あたりはいまだ蚊

も出ねば、

蚊にはまだたかぬ煙を淺間山

十 日

此夜和田にとまる。

あるじが子とて惣太郎といへる十二三

な童の、茶など運びてかしこけなるに、

見えたりたる山をとへば、かれは大田

澤、これは檳榔山とをしめ。名にしおふ

くろかみ山にもよらずして、いかで此名

をよびけんとゆかし。つれづれなるに、

おもしろき草席やある、みせよといへば、

あるじのいかにたくはへ置るに、運氣

論といへる醫書を取たり。是はむづか

しくてよみがたしといへば、義經記を持

來れり。こゝかしこよみてつかれをまぎ

るゝほど、重はそこにかしこまりをれり。

やがてみむ轍もちかし武藏坊

十一 日

和田峠をかりにてこす。こゝはすぐれて

高き嶺にて、今すこし上の方に鳩の峯と

いへるは、日本にならぶ方なく高きよし。

されど此國は地高き故、人はさしも覺え

ぬと也。ゆに雪の多く残て有。けふはこ

とに雲深き中をわけ行に、咫尺もわかぬ

ほど也。

雲ふみてなほゆかし山郭公

行尊僧正の、花より外にとよみ給ひし谷

の鶯のみ、けちかき心地ぞする。かしこ

へも山里に春は告ると歌にもよみし雪の

うちの、夏はしらでやあらん。歌よむ人

などは、此心もていひつとくるふしもあ

るべし。

本山にとまる。

十二 日

けふは福しまにて、山村氏が亭にいらせ

たまふ。家るつきく敷、のしめ上下に

もてさわぎて、何くれともてなしたてま

つる。鯛鮓などの膳にひろがりたる、け

ふは山家めきたる心地もせず。

俎板のなる日はきかずかんこ島

十三 日

けふは名におふかけ橋をわたる。

眠るなど馬士はしかれど百合の花

臨川寺にいらせ給ひて、寐覺の床御覽す。

爰に筏士のさま／＼自由をえたるを、め

つらしき物にめでさせ給ふ。いかばかり

吹と、とふべき折にもあらず。

ちる物はなくて筏に青あらし

此あたりを見かへりの里といふ也と、人

の指さしてをしふ。

又いつか木曾の麻衣あさからぬ

なごりやあとにみかへりの里

是はもとより歌枕にもあらねど、句のな

かりければ、歌よむ人のまねびしてかく

口ずさむ。いとかたはらいたし。こゝに

あやしき翁のこと、世俗にいひつたへて、

誠は三歸の里とかけり。

野尻にとまる。

十四日

大井にとまる。

山中はたえて竹のなき所にて、桶の簞な
どいふ物も木にて營めり。こゝの宿にて
初て竹の子を調じて出せるを、いとめづ
らしくて、

竹の子にあふて家路もほどこかし

十五日

土田にとまる。

あくる日家につき侍る。此間句もなし。

熱海紀行

府君の御母公、ゆあみせさせ給はむとて、

延享のことし、江戸より豆州のあたみと

いへる所へわたらせ給ふ御ともつかうま

つり、葉月の廿九日江戸を出て、熱海に

いたるは長月二日なり。

草の葉に月のたびねも二日から

此里のさま、後に山めぐり、前に海近く

して、いさみぬ須磨のけしきもかくやあ

らんと、折から秋のね覺も心すむ旅寐に

は有ける。湯本はことに我やどりの後に

近ければ、日夜に六たびばかり、おどろ

くしくわき出る音高く、山水浦波にひ

びきあひてかしがましき物から、世の中

と渡りくらべて、いかにとかいふべき。

網引釣するわさもあれど、おり立ておの

が世のたつときとするものは少し。耳な

れぬ魚の名ども、うつは、ひらく、はま

ち、そうだなど、後にはおのづから見お

ほえてみないふ。山田色づく頃にて、鹿

追ふ小屋に引板ひきならすなど、めづら

しう哀なり。鹿の聲は夜もすがら聞えて、

夕霧の巻などよむこゝちす。

夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲

月は殊に海より出て山に入。宵の詠え

ならず。浪よするうらのけしき、我やど

りの東おもてよりもくまなく見えわたれ

ば、明暮欄干に打もたれて、烏帽子きた
らましかば、我を屏風の繪に書べきを
笑ふ。

ほし棹の是にも月や濡浴衣
尾花ちるかたはへりけり浦の波
打まぜて浪にまけたる砧かな
釣舟や案山子のり行波の上

あるじの子彦助といふ。年十四ばかり。
常に來なれて、あまのさへづりめきて、所
のことなど聞おほえて語る。かれに案内
させて、あたりの宮寺など見めぐり、漁家
に茶を乞ひ、樵夫にたばこの火かりて、
吟歩機を忘るゝ程いひ捨てたる句ども、例
のしる人のもとに書つけてつかはす。登
歩一里ばかり、日かね山にのほれば地藏
堂あり。駿豆の海山眼下につらなり、景
色いふばかりなし。富士は西に隈なく、こ
と山の秋にわかれて雪しろき姿、衣錦^{いしん}。
尙^{なほ}銅とかくいへる、此山の徳に比すべ

きにぞ。

四方山のにしきや富士にはつかしき
都松といへるは、染殿の後の跡のしるし
也と、野老のいひ傳へたりと語る。いつ
れの時にか、柿本紀僧正、染殿の后と密
通の事ありとて、さらぬ疑の科にてこゝ
に流されて後失給ふ。后は八幡といはひ、
紀僧正も宮といはひしが、其仇名のうき
をいとひて、二ッの祠、むかしはたがひに
相そむきてありし。今は八幡は外にうつ
して、其謂も残り侍らず。常に後のみや
こを戀たまひしが、あとのしるしの松も、
都の方へ枝葉さしむかひければ、これを
都松といひける。僧正の社のきはに大き
なるさくらの有し。中頃此うしろに御殿
作けるが、さはりなりとて此木を伐しか
ば、かの松も程なく枯にけりとぞ。其木
のともに枯たるちぎりならば、ぬれ衣の
名もいかなりけんと覺束なし。

松かれてどの木へ蔭や所がへ
僧正の祠は、ことに大きな椎の木二本
のはざまにあり。

御所柿の色にこりてや椎が本
湯前權現に我疾をいのる。

新蕎麥や疋氣に利生みせたまへ
伊豆權現奉納。

海と山兩部に月のくまもなし
葉平井は里中にあり。爰の男女の常に水
汲かけうつして、おのづから妹脊の媒と
もなれば、いひならはしたりとぞ。

豆ひきの影や井筒にまめをとこ
平左衛門湯といふあり。平左衛門かひな
しとよばれば湧出るとて、里の子どもの
呼て旅客に錢などもらふ。

子どもいざよばれ紅葉に立田姫
重陽にあふ。

撰り出して菊をいはゝむくさ枕
後の月。

山の湯も温鈍にわくか後の月
木の宮。

木の宮も草からさきへ秋くれぬ

暮秋。

行秋の干魚に残る鳴子かな

天神。

飛石や梅にまけじと霜の花

眞鶴が崎。

まな鶴もみじかき冬の日あし哉

大嶋は遠くかすかなり

大しまや片目しぐるゝ遠目鏡

はつ嶋はいとちいさき嶋の向に近く浮べ

り。沖の小嶋はこれ也といふ。又は大嶋
をいへりとも、里人のつたへもまち／＼

なり。

木がらしや片手に撫る嶋ひとつ

十月十三日、あたみをたゝせ給ひて、江

府へかへらせ給ふ。道すがら鎌倉に三夜

ばかりおはして、寺社古跡ども御覽す。

したがひ奉りて、のこりなくみめぐるほ
ど、句などいふべき所もおほかりけれど、
事にまぎれてみならしつ。道をまもり
の神に申。

守り給へ神もおたびの道すがら

榎の島。

此神の御手にやにほふびはの花

白菊が淵。

十月やけにしら菊の名もむかし

龍穴。

此洞をおもへば神も冬ごもり

鎌倉にて、

鎌倉のかまの名さびて枯野かな

梶原が矢筈もふゆゆかゝし哉

何がしの寺にて重衡の盃をみる。

さかづきに銚子もそへず寒さ哉

盛久が首の座。

盛久が命や濱のかへり花

鶴が岡八幡。

御供して鶴もるすなり神の松
十九日、金澤の方にまはらせ給ふ。能見
堂といへるより八景を見わたす。奇絶の
勝景、ことばにのべがたし。折からうち
しぐれしに、

八景のうちふたつみしぐれけり

廿一日、武府にかへらせ給ふ。

武蔵野紀行

庚申のことし(元文五年)霜月のはじめなりけ

り。江戸を出て清戸といふ所に、旅より

たびのかりねも十日あまり、母やある、

子やもてると、あるじに咄もやをらなじ

みそめて、此あたりの事など尋きくに、

昔はこゝもとも月の名におふ武蔵野なり

しよし。今は家つらなり、田畠と變じて、

露おく草の名にもあらぬ大根牛房の、こ

とにめでたき里なりと語る。

武蔵野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端々には、其廣き野の迹のこれりと聞て見にまかりける。案内するを

とこの聲なるも、時鳥きくしるべならねばと其日の興にして、龜が谷下富などいへる村々を過て、かの野には出ぬ。誠に四方に木竹もなく、草さへも今は霜がれはて、哀に物すこき原のさま也。

武藏野やいづこを草のかけひなたそこら見めぐりて、

枯野にもすまきばかりは薄かなくれ行空もおもひやりて、

武藏野に露ひとつなし冬の月又の日、野火留といふ所を尋侍り。こゝは伊勢物語にけふはなやきそとよみし跡なれば、里の名もかくよび侍とか。葉平塚とてさびしきしるし今も残れり。歌のこゝろをしらは枯草に吸がらなすて、とたはむれて、

こもるか問へば枯野のきりくす

内津草

うつゝの里に住る更幽居三止なるをのこ、予が菴に來る毎に、いかでかの山里にも尋來よかし、あるじせんとそゝのかす事年あり。されど今はたゞ老の鴉の月に浮るゝ心さへ懶て眠がちなれば、羽をのぶる事もなくて打過しが、此秋いかなりけん、しきりに山里のけしきゆかし、ゆくりなく思立て、かのがりとはんと葉月中の八日丑三ッ過る頃、庵を出たつ。月くまなくすみわたりて晝のごとし。也陪なるをのこは、三止にも予にも常にうらなくむつまじければ、よべより庵に來りて此行に伴へり。櫛（比）次の市中長く過行に、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まづ名のみにて傾ぶく影は惜ますや、いとくちをしとおもへど、さ

はれ我も又かゝらましかば、かゝる清光もいざたなくしらでぞあらまし。大曾根といへるあたりに至れば、家ゐどもさま劣りて、鶏の聲戸々にきこえたり。おもひいづる詩ありとりなく里の月かくいはず、そは何の詩ぞとおほめく人もあらんかし。

片耳にかたかは町のむしの聲やゝ人家をはなれて、野山のけしき月の光に見渡す、いとあはれ也。山田川から川をわたるほど夜猶ふかし。此川はかちわたり也。

八月の川かさゝぎの橋もなしすさども、あなつめたなどわらひのゝしる聲に、我は駕よりさしのぞきて、

かち人の蹴あけや駕に露時雨ゆくく月もかたぶき過て、夜も明なん

とす。
蘆からしらむ夜あけや蕎麥畑

鳥居松といふ所にて、わりごやうのものとてよよといふ。

夜と晝の目は色かへて鳥居松はより杖曳でちより行。大泉寺といふ所にいたる。わづかに一里ばかりを歩びて、老の足まだきこうじにたり。又駕のる。

山がらの出で又籠にもどりけり道の側に尻ひやし地蔵といへるあり。靈驗あるとて人の信仰するところ。

尻ひやし地蔵はこゝにいつまでもしりやけ猿のこゝろではなし坂下明知西尾などいふ里をへつゝ行。駕たてるところ、や蓼の花

むかふより來れる人の、うちそばみて笠ぬぎたるを見れば、内津にすめる試タなりけり。かれは彼さに茶をひさぐ者にて、庵へもうとからず訪ひて、年頃相しれり。兼てけふ我とふべきあらまし聞えて、

三止がかたらひて出せるならし。とばかり行て三止も出むかへり。こゝの名をとへば鞍骨といふよし。むくつけき名のいかなる故ならん。

けふこゝへたづね來むとはくらほねやくらけの骨にあふ心地する

と戯れて打つれゆ。此あたりより山路やまさしく、峯々左右に近くそびえ、大きな岩ども道もせにそばだち横たはりて、決ゝたる溪泉いたる處にきく。

名もにたり薦の細道うつゝ山ひるばかり内津につく。此所のさま、妙見宮の山うちかこみ、杉の木立物すごくしけりて、ふもとにつきぬ敷家あつたなれり。

山は杉さとも新酒に一つかねあるじねもごろにもてなし、湯あみ物くひて心落るたり。

夢もみじ鹿きくまでは臂まくら

あるじ、

まつ名もはての十九夜の月

と臨してその末もありつ。美濃なる虎溪といへる所ながめよしと、はやうより

聞わたりつれば、行ばやの心ありけれど、其あくる日はまつとどまりて、何くれと

語りなくさむ。亭の前、とばかり庭ありて、いと間近く山さし覆へり。其間に細

谷川ながれて、水の青岩にたえず。此上にさしわたして造れる小亭あり。枕流亭と額を掲たり。此名は孫楚が意ならんと。

口すゝぐ石もあたりにきりくす

此日妙見宮に詣す。舍よりはいとちかし。猶奥の院へ参らむといふに、こよなうさ

かしき道なめり、老の歩の及ぶまじければ、只やみね、と人いふ。されど阮籍

が窮途にこそとどまらめと笑ひて登る。左右大きな杉どもの枝さしかはして、

日の影もゝれず。細き道の苔なめらかに

石高し。右の方に天狗岩といへる世に知らず大きな巖そばだてり。只一ツの山とこそ見しらるれ。かゝる怪しき岩は他の國にもをさく／＼なしとぞ。

這ひのはる薦もなやむや天狗岩次第に道さかしく、岩を攀、木の根にすがりて、七町ばかり登りて、少足とどまる所に休らふ。こゝに、あふけばかうがうしき拜殿みえたり。夫までは十間斗、ことに危き坂あり。社は猶奥まりてましますよし。是まで登しだにも我にはこちたきわざなり、今はふようなりとて爰にぬかつきて歸る。

杉ふかしかたじけなさに袖の露けに本州にかゝる宮のありともしらざりけり。若き人ゝはふりはへてもまうでぬべき靈地ならし。其あくる日より雨ふり出て、廿四日までではれやらず。其ほどの事ども筆にまかせて書あつむ。

一日枕流臺にて俳諧す。余興に戯れて、

こゝに住て善正日夜きく水は

ひんがしならで西にながるゝ

あるじが常の名、長谷川善正といへば、

かくいへるならし。明智にすむ醫師羽白

なるもの尋來りて初てあふ。

堀て來て草に藥の名をとほむ

と書てあたふ。此人も俳諧を好めり。

試タが家は更幽居にさしむかへり。一日

こゝにも遊ぶに、あるじ一句を請へり。

なりはひいとゆたかなるをのこなれば、

あたゝかな家あり山は秋ながら

こゝはひたぶるの片山里とこそ思ひし

か。更幽居はさらにもいはず、試タがあ

るじまうけのさますらすべてよづきて、

調度などいとお清らに、こゝろつかひた

るふるまひどもけしうはあらず。よろづ

目安かりけり。

府下萬松寺にさきにいまぞかりし綱國和

尙、退隱して此里見性寺といへるに假に住給へり。久しくしれるならひなれば、雨の際に訪ひて、とばかり語りて歸りし後に寄らる。

深山客稀有孤猿

豈謂高軒過遠村

煨芋無收寒涕力

肯令王帶鎖空門

韵を廢で謝す。

滿耳溪泉又斷猿

渾忘塵想宿山村

逢君猶憶重遊約

嶺上雲多恐鎖門

ある夕あるじ酒すゝむとて、こゆるぎのいそぎありくまゝに、鉢に杜若をつくりて水をもり、肴調じて出せり。みれば茗荷の子をもて、巧に花の形をまねびたり。八月のはちに咲たるかきつばた

さてはみやうがに物わすれ花

若きをのこの、酔のあまりに、かうやうの細工に思付けるにや、柿にて猿を遣らんとて手をあやまち、血流れたり。人々さわぎてやみたりと聞て戯ぶる。

こりはてまう此趣向手がきれた

いらざる柿のへたの細工に

といふに、例のどよみになりぬ。

あるじ墨竹の一幅をとう出て賛を求む。

唐さまの筆なれば、ざればみたるほ句はいかゞならむと、一絶をつくりて、

不_レ與_二梅_一 柳_二交_一 心似_レ厭_二塵_一 累_二雪_一

露_ハ深_レ 夜_一雨_一餘 何_レ借_二二_一妃_一 涙_一

と書てあたふ。

雨にたれこめて日をふるまゝに、試タがもとに信濃なる新蕎麥をえたり。是ひとくさにてもてなさむと招くに任せて、二度此家に遊ぶ。其日はしばし雨小止みて、後の山近く猿の聲しばしきこゆ。過し日枕流臺のうへの山遙なる梢に、猿の餌

を求めて木づたふを、端居ながらめづらしとて見たりしが、けふは雲樹ふかくかくろへて姿はみえず。

新蕎麥に猿きく山の夕かな

と書てあるじにとどむ。

廿五日からうじて雨晴ぬ。けふは虎溪見むとて出たつ。はひわたるほどと思ひしも、二里ばかり隔てりとぞ。道の具ども、

例のあるじの心いれてこまやかにまうけぬ。猶あなひがてらとて伴ひ行。里の數越へて、ゆく／＼いとくるしき坂一つ登り

下りて、やをら至り着ぬ。彼の境は、かねてきゝわたりしにも似ず、寺のけはひいたうふりたるとはみゆるものから、住な

せる僧の心からにや、哀にたふとき方たえてなし。柱、格子など、順禮といへるものゝならひに、あさしまきまで物書けがしたり。庭のさま、人の手して造なせ

によそほへるも大どかならず、いみじう心おとりして、人はとまれ、我はめもとまらず。門の前小川清く流れ、岩そばだち、木立ものふりたる隈、されど見所あり。庭なども、たゞかくおのづからにてあらまほし。庭のかたはらに座禪石とよべる高き岩あり。是にのほれば遠近の望よし。

座禪にも目はまよふ山の秋の色

歸るさの道すがらにいふべき事なし。すべて此頃の明くれに、鹿の聲は聞ざりけり。我耳のうとき故かとうたがふに、いまだ時早くして啼すとぞ。されど若かりし昔、所々の旅ねに聞馴つれば、こたみ聞もらしぬるもはいなき事ともおもはず。三止はもとより年ごろなつさひて、共に心をもしりかわしぬ。母なるものも、過し年めのいたはりありて、醫をもとめて府下にいでしすがに相しれり。家

とうじさへに、此ほどの日かすにうちなれて、よろづまめやかに、あかなきさ

れど、事繁くて洩しぬ。詩ひとつ作りてあるじによす。

にもてなされるれば、老の心なぐさみて、あやにくのながめにふりこめられぬれど、つれなくわぶる事もなく、あからさま

張北山林遠府城
相逢多日雅談清

とおもひしも、かどなへて七日のかりねをぞ重ねぬる。故郷に待人もたる身にしも

夜深老樹添霜色
夜静流泉疑雨聲

あらねど、かゝらば斧の柄もくたしぬべし、あすは歸らんといふに、あるじ猶轄

驛馬稀傳都下信
啼猿常動客中情

を投るの意ありて、今ひと日はとせちにとどむ。

纔看隣店商家在
豈比塵衢爭利名

も一りんみよと木槿の苔かな
いな船のいなにもあらず、心よわくて又とどまりつ。

こゝに來てわがのがれにしかくれ家
猶世にちかきほどぞしらるゝ

追はれねばたつ事しらず秋の蠅
是にて一卷の名残をつらぬ。すべてしづ

の僧、我たしめる事聞しりて、例の河漏子にてもてなされぬ。

けき日くらしには、俳諧して遊びつる巻もつもありぬ。あるじはもとより、也陪、わが従者の文樵なども、時々句ども有つ

鐘にちる葉や山寺の秋のくれ
あるじの求にかくいひてとどめぬ。

廿七日にはつとめて内津を出てかへる。

あるじも猶府下まで送らんとてともなひ

出。行厨の事などいかめしくかまへて、世を捨人に似けなきほど也。又例のたはぶれて、

老武者の我もなぐるのさね盛が

さいとう辨當までせわになる

いでや身の一たびやまひつきてより、つや／＼世をはかなみ、たどかゆるふの夕をまつ心地しつれば、たまはりし縁をもかへし奉り、逢がもとに隠れしは、はたとせの昔なりけり。其ためならぬ物から、とみに仕への途をのがれ、おのづから名利にかゝつらふ心の疎くなりもてゆくや、申す命つれなきたつきとはなりけん。稀てふよはひもかぞへ過て、此秋かゝる山ぶみをさへ思ひたちし、我身よくしれる我心のあやしきまでになん。さるにてもふたゝび來べき境ならねば、しかすがに名残おほえて、跡の山ゝかへりみがち也。

應に似ず跡にこゝろの山わかれ

左を右にながめはかれども、かへさは
みなもと見し野山也。ゆき／＼て、かち川
にいたる。こたみは水かさ増りたれば、駕
ひで、此まゝ渡りがたしとており立ぬ。

すさどものおはむといふに、いな、そは
中々あやうからん、けふはいたうも寒か
らざれば、たゞ手をたすけよ、かちわた
りせむ、老にたれども猶かばかりは難か
らじと、ほそはぎいと高くかゝけたり。
わかえたるふるまひの我ながらをかし。
老の浪そふ影もはづかし、淺くとも渡ら
じとこそ丈山翁はよまれしを。

紙衣きぬ秋なればこそ河渡り
夫より大曾根にしばしやすらひて、夕日
うすつくほど、わが桑梓にはかへり着ぬ。

思ひいづるきのふはけふの夢なれや
しばしうつゝの山のかりねも
歸りて後さう／＼しきすさびに、いひ

捨かきすてたる事どもあつめつとりて

更幽居に贈る。字のたがひ、かんなの
書誤れる物も少からじ。かたはらい
き詩歌のまねびし、さるがひ歌のはし
たなきはぐどものかたほなるなど、
物くるひしてかいまじへたる老のまさ

なごと、珥珥とだにいふべからず。只
これ搏桑の一帖なり。愛、屋上の鳥に及



字づら衣

捨遺 下

記余白二偈歌

相知る人のがり、梅雨晴の空もとめて問
ふと侍り。そのあるじ俳諧も少ししりて、

ぶとか。我をいつくしむ心にあやまち
て、燕石を十襲せし宋人の愚に、ゆめ
ならふことなかれ。もとより人の知る
ものならねど、四知ありといへば、天
わらひ、神笑はむ。見果なば、とみに引
やりて、我ため耻をとむべからず。

安永二年巳九月

七十二翁狂夫也有

ざれどよくいふものなり。そこなる机の
もとに引ちらしたる反古あり。何ぞと
へば、此盆あそびに、例の子供の踊るべ
きうたの唱歌作れと、人にそゝのかされ
てかきたるなめり、されど又心におもふ
とありて、世に出さずなりぬ、只やがて
引やり捨る物也といふ。とりて見れば、

實きしらぬ旅のともあり。中にをかしくもつづけたる哉と覺ゆるふしゝもあり。われ俳諧しかれに負べきと思はぬを、かゝる物つくれといはむに、いかで是ほどにいひ出べき。世はさまゝのぞえある物かなと、をしき様に思へるまゝ、只こなたにて引やりすてん、我に得させよといひて取かへりつ。此端に余白あるにまかせて、潜にかきとめおきぬ。題號をいはず、さと茶の湯などこそいはめと、其人いへりけり。

世の中にすぐれて花はよしの山、紅葉は龍田、茶は宇治の、都の辰巳それならで、さとは都の未申、數寄さば誰が名に立て、濃茶の色の深みどり、松の位にくらべては、圖ひさいふはひくけれど、情はおなじ床がざり、かざらぬ誠あかし合、問夫や人目の中くざり、なかだちいらぬ口切の、後はうき名の下地影もる月のさしつけて、それといはれど世の人の、口に猿月も立らぬ、

あうて立名が立名の内か、達はでこがるゝ池田炭、炭を雪かさいふたがむりか、其白炭の塵を見て、雪にはあらぬあれ灰、くだけて物をおもふ夜は、夢さへろくにみづこぼし、水すす人にふかゝさ、のるは三ツ羽のかるはづみ、煙はいやと飛石の、すわらぬむねのうら衰、ふくささばけぬ心から、きけばおもはくちがひだな、達うてごうしてかう箱の、柄杓の竹は直なれど、そちは茶抄のゆがみ文字、くぜつにとけし茶せんがみ、にくいあたまたの鉢たゞき、ひやうたんならぬ炭ざりの、ふくべも花は夕顔の、それはなつめのたそがれに、五條あたりや四疊半、よしや氣長に待合せ、茶うすのめぐる月さ日も、あらば花実花生に、はなれぬ火ばしよりそひて、うさもはなしのはつむかし、昔はなしのぢいばゞさ、なろまで釜の中さめず、縁はくざりの末長く、千代万代もへ。

是を近世女てまへとなづけ、もてはやす。爾後にいたりて、翁は女手箱にもとづきかれしなど、人の思はむるわづらはしければ、そのことわりをかいつけおこ。

鶴 賛

ウツノ鳥

梅に傍ふ仙家の風流もつばら隠逸の庭に愛す松に伴ふ島臺の規式かならず祝言の席に飭る

辻 君

ウツノ鳥

月にうかるゝ鳥も多きに

いかで夜鷹と浮名にはたつ

袖はやなぎの人を招きて

枕の草にむしやとびかふ

待相圖。うたはうたへど

あふてわかれの文におくらず

曉かへるそでのしろさは

馬場の夜寒の霜やおくらむ

茄子

エケノ鳥

むらさきの名にめでゝ

まづちぎるせどのはたけ

柿にへたはまなぶとも

瓜のつるにはならざれ

つけものゝ夏のあした

鳴焼の秋のゆふべ

献だてのしなくは

豆腐にも耻ざらめ

風鈴

ウツノ節

はるは山寺ならでも

ちとつらし此かねよ

なる日はおのづから

花も風のふくものを

翁像賛

富貴誠に浮雲

滑稽初て正風

道のほとりの木槿を吟じて

ひそかに人の教有

窓のまへに芭蕉を裁て

永く己が名とす

此翁たれか詰く

梅瘦て笑ひ松老て高し

笠を携て旅の情やます

筆をとりて賛する辭なし

又ウツノ節

俳諧に故人なしといひける

いひける翁故人となりぬ

それより故人幾故人

只此故人を慕ふとやまず

又イキノ節

詩家と李白うして謫仙とよび

俳門に桃青と祖翁と稱り

かれも三石の奈良茶を味は

さらに百盃の酒にかふべし

翁題笠圖賛

題笠旅装吟尋花狂客心

豈無芳野句可識不言深

人日

ウツノ節

烟も雪間に若がへりつゝ

去年の案山子も老忘れむ

なづな七草七日つみては

はなのなの字の猶も待るゝ

蛤

アカノ節

もとの身の雀ならば

竹の枝にもなれじや

今は桑名に焼れて

松かさのおもしろさ

寄團扇戀

ウツノ節

えにしも夏の手にはふれつゝ

いかにとばの藪そらとなる

一夜あふぎの名にあやからは

とけて心のうちをかたむ

手習の師に書てあたへし聯句

硯の海は明暮に湛へて

桃の日の沙干もなく

筆の林は夜日に茂りて

霜の後に落葉も見ず

大宛銘

賢人の耳に鳴らねば

風の吹日もすてられじ

鉢叩も手に余れば

雪の降る夜も静なり

鯉の賛

及ばぬ瀧に思ひをかけて

鯉をすればや鯉と呼らめ

のはれば落る悔ある世に

淵に住身を安きとはしれ

布袋賛

鰯る錦の世はうらやまず

布の袋の名ともなりぬ。

梅は肥たと我を笑はゞ

我は瘦たと梅を笑はむ

廻文

さくみつゝまで待てまつつゝみ草

俳諧歌并辨

煤はきの日とて立たる居風呂

よこれぬ旦那先へ入けり

娑婆にては善知鳥安方と見えしも、冥途

にては怪鳥となり、よのつねの米屋味噌

やも、節季には懸乞となりて罪人を責は

たる、世の有様を詠めて、あか拾坊主の

口ずさびける。

たつた今乞食しかりし門口へ直にむく

いて懸乞がくるあてなしにつかひく

て節季には錢は無いとて留守つかひけ

り

俳諧歌は古今集にいへる俳諧体にもあら

ず。かの集にあるは歌人の俳諧歌にて、

俳諧師の歌にはあらず。狂歌とは混すべ

からず。狂歌は全鉢の趣向を求めず。其

物其とにすがりて、他のものゝ名をか

り、秀句をとりなし、と葉をもちりて、

全く言句にをかしみを求む。俳諧歌は趣

向一ツをたてゝ、其とをすらくといひ流

して、と葉の縁字義の理窟は曾てとら

ず。されば右に云二首、はじめのは全く

俳諧歌にして、後のは狂歌といふにのが

れず。二首のさかひ、こゝをもつてしる

べし。

いろは歌

いろはの四十七字を以てうたをつくり、

六林子よりよせらる。それにならひて三

首つくり、返しながらに贈る。

541

をしむともいそぐともなき年くれて

待すいとはぬ春はきにけり

初日の外面を見渡せば、けさは農夫も鋤
鉞を休て、惠慶の葎の宿とよまれし秋な
らねども春はきにけり。

田島に人こそ見えね年の市

夜半まで空にまどひし足も皆

かしまりてや雑煮喰らん

八體付方

聞耳たつる門の人音

其人ふぐ汁の鍋を片手に提ながら

其場片側はくら屋も交る手力町

時分夜なかと思へば星の明かり

時節延びくた祭の空も五月晴

天相一しきり雨やら松の嵐やら

親相勘當の跡にまよひの親ごころ

俳木曾もまたのがれて見れば浮世なり

丈草文跋

傘と剃刀をさへもたぬ身の上かなと、よしなき貧乏自慢がこうじて、明日ある人のまごへ齋によれば候に、髪は汗をすゝる邪冤になり、雨は衣の袖しぼらんとを思ふに、ひしこままりはて申ゆまゝ、御無心申入ゆ。よくくさぎすまして一丁、たごへやぶれかゝりても一本、御かし可被下ゆ。委は参ゆ而可申述べ。御内儀御息女御心得可被下ゆ、と申ゆて存出ゆ先夕はゆるくさ語ゆ而満悦申ゆ。以上

正月八日

丈草

堀彦左衛門様

此文跡に日附を見れば

髭の邪魔いかにきのふの齋粥

蘿隠戯書

寫海洲子文

このごろ反古を引やる中に、海洲子が文一章あり。此人柳川氏、文才ありて詩を能し、書を能す。俳諧又幽趣を得たり。惜むべし、五十の頃世をさりぬ。遺文いづれにかちりうせけむ、今わづかに此一章を見て捨るに忍びず、又のこすべきかたもなし。しばらく我が文章のなかにとどめて、追慕を慰む助とす。

壽光先生傳經世

海洲

壽光先生もさ山中を出て人間に交はり、つれに一人臺上に坐して黙爾たり。人來て笑へば笑ひ、怒れば怒れり。只人に順へり。是を慕逆とやいはむ。しかれども美人に愛せられ、醜き人にくまれ、やゝもすれば地になげうたるゝのとあるこそはいぶかしけれ。予久しく先生を拜せず。早起、往て拜す。げに先生や婀娜たる美少年なりし。秋の霜一度下り、蘭艾ともにくだけ、しら髪兩鬢にたれ、笑へる齒あばらとなれり。

下遺拾 衣らづら

かく零悴せるもの須臾なるはいかむぞや。

先生黙爾たり。それ人は一世にありて名こそ遂べきに、一臺の上に過くとしてかゝる姿となりたり。たこへ鶴書のいたるとありとも、今はた用には立じ。素盞の責はいかむぞや。先生黙爾たり。予涙を含んでつら

く先生を見れば、先生も涙を含んでつらく我を臨めり。長物語に朝飯の時過て、さらむとすれば、去らむとせり。立歸れば、

立歸り、しばしわかれなまし、ともに黙爾としてわかれぬ。其後古かれ店を見れば、

先生黙爾として居れり。また其後神路山に登りて見れば、先生猶また黙爾として居れ

り。先生のとほは測るべからず。

悼伯母辭

是は敬物語の言葉をかりて、
俳文にありしとよぶかるべき
か。只是も筆に任ぜし一筆の
すぎなり。

こはそもはかなき世なりけり。過しはわづかに廿日あまり、武藏に旅立する御いとま申さむとてとひまるせしに、例の

まめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くさゝせ置給ひしにつけて、過し冬さくらのさし木といふと人にならひて、庭にさゝせ侍りしに、まことにあやまたずなんとけいし侍りつれば、うれしきときつる物哉としの冬かならずさゝせてむ、其すべきやうをしへてと、のたまはせしほどに、かゝる御わかれあるべしとはおほしかくべきや。なほ何くれとかりつづけさせ給ふついでに、此ごろおほしよれるとあり。下にあやしの耕すをのこかきて、上つかたに雲雀の高く上りたるさま盡て、それにほほしてえさせよとありしに、いとちたたくこそ、すぐなる筆のいかとおよびがたくや侍らん。今は旅のいそぎにしつ心なく侍れば、さるべき發句もとみにはおもひよりがたくなむ。さるにても吾妻に下り侍りて、いかでね

んじて、まほならずともかきとゝのへて率りてむ、とうけがひまるらせし、其いとまもなく、今はたくやしきかずとはなりぬ。我母上をはじめて、めの御はらから九ところまでおはしつ。みなにけなからぬよすが定ませ給ひながら、つちつどきて世を早うさり給ひ、今は二方ばかりぞ残りともまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとど御かたみとも見奉れば、なほさらに過こしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけにいとまなき物から、いかでうとからすつかへ奉るをりもがたと、行末遠く思ひてしを、かゝるはかなきたよりきける心の、いくたびも只夢かにぞたどられ侍る。彼ののたまはせし空の雲雀も、雲がくれ給ふべきはかなきとしにやとさへ、このるかたなくおもひつゞくるまゝに、

なき魂やたづねて雲になく雲雀

鳥獸魚虫の掟

世上困窮につき、今般鳥獸并虫のともがらへ一統の簡略申付ゆ。其外行作惡數品相改申渡候。左の條々急度相守申べき事。

一蟬、すゝしの羽織を着候事、過分の至ゆ。向後は横麻一羽ぬきに仕替申べき事。

一松虫鈴虫のともがら、籠のうちに砂糖水を好み、奢のさたにゆ。向後は野山の通、露ばかりにて精出なき申べき事。

一蟻塔を組ゆ事、自身の功を以建立いたしゆ儀はくるしからずゆ。寄進奉加等頼ゆ義は一切いたすまじくゆ。且又熊野へまゐり候に、大勢運にて無益の事ゆ。已後は二三人づゝひ次第に参り申べき事。

一螢、夜中火を燈し飛行ゆ事、町々家込の所は火のもと氣遣敷ゆ得ば、遠慮いたすべくゆ。池川田地等の水邊はくるしからずゆ事。

一蜘蛛、御領地の内においてみだりに網をはり、諸虫を捕ゆ事不届の至ゆ。以後は其場所相應の運上さし上申すべき事。但、蠅とり蜘蛛は運上に不_レ及事。

一蜜蜂の小便高直に賣ゆよし、諸方の痛になり、よろしからずゆ。向後は世間一統に、只米六斗ほどの積を以相はらひ申べき事。

一蠅螂、己が短慮の我慢にまかせ、斧を以諸虫を殺害いたし、不届千万に候。向後はむね打をも一切いたすまじき事。一金魚のともがら、近年ことに花美に相なり候。向後金銀の飾一せついたすまじくゆ。

但、赤塗に砂箔等まではくるしから

す候。

一蛤、春暖のころ己が快晴にほこり、樓閣を建ゆ事、甚奢のさたに相きこえゆ。向後は右跡の普請一切無用ゆ。もし居宅の柱損ゆとも、根つぎいたし用ひ申べき事。

一蝙蝠、晝は橋下にかくれ居、夜々人里村里へ徘徊いたしゆと、其意を得ずゆ。鳥獸のあらためこれあるせつは、何方へも申ぬけ役義等相つとめすゆよし、不届の至ゆ。向後は立合の支配をうけ、兩役屹度つとめ申べき事。

一音喚鳥、猥に五色の錦繡を着いたしゆ事、甚奢にゆ。向後は何色にても一色に相改、勿論縫箔等一切いたすまじき事。

一白鳥白雀等、此間は相見え候。先年は頭ばかり白さへ稀なるとにゆところ、近年猥に相なり、よろしからずゆ。以

後會て異相の弊いたすまじき事。

一鼠、嫁入の躰、とくしく相聞えい。廿日鼠に五舛樽もたせいと過分の至り、以後は提錫にて相濟し申べくい。振舞の上、天井にて躍など催、さはがしくい。人々妨に相ならずい様、明き二階椽の下等にて盆の中躍いとくるしからずい。

一狸、つねに大酒を好み、亂舞の樂者のとにい。薄陽の江邊にて持出しふるまひ、向後一切無用たるべくい。據なき義にて會合これありいと、一種一献にかざるべく候。尤酒は最寄のうけ酒屋にて小買いたし申べき事。

一狸、ふぐりを四疊半にのばし、茶を立、人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむるとよろしからず候。右の業相止申べくい。自分の樂としてはら鼓打い事はくるしからずい。

一馬の太鼓の義、往還問屋前を憚らず不禮の至い。畢竟これも榮耀のとにい得ば、以後は相止申べくい。

但、厩にては苦しからず候ども、火の見時の太鼓にさし合申さざる様相つゝし申べき事。

一青鬼赤鬼のともがら、虎の皮の褌いたすまじくい。當時病犬の皮澤山にい得ば、早速仕替申べくい。

但、右は家持頭分の鬼の事い。借屋住召仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切れを腰に巻用ひ申べき事。

右の條々かたく相守申べくい。忽に心得違これあるやからこれあるにおいては、急度答申付べくい。品により蟻の町代組頭まで越度たるべくい。

寶曆九朔七月

玉壺軒記

隨三輪堀江中老人の語一

何ぞ必ずしも深山の中菴廬の下のみならむやと、むかし朝廷に俗を避たるも、耳目はおのづから世につかはれもしつらん。

こゝの市中に一つの隠家ありて、豆腐賣はよくしれども、とりあけ婆はさらにしらす。つきんしき住居のほか、九尺にたらぬ別室、とにおも白うまうけ、前に泉石の目を娛ましむるも、今の主翁のたくみなせるにはあらず。もと住し人の殘し置る月と花とは、今も閑にして今は猶ふるびたり。人の多きを深山木にして、とよみしも此あたりにや。伐木丁々たるは、桶屋のたゞく也。鳴子のからくとなるは、菓子屋の脊戸か。田家山莊の風流、こゝに備るのみならず、四方は城下の豊なれば、朧夜の笛も雨の日の三味線も、近からぬ方に音なひて、我身はよそに聞流せば、樵歌牧笛にもさびしさは劣るじや。そもや主翁の身のうへ安きと、仕官

はわかきにつくしたれば、北山移文の惡口にもあふべからず。色は老をしりて遠ざけ、酒は淵明が腸もなければ、是ばかりは俳諧師のをり／＼來りて戸棚をさがすは、つもり外の外なるべし。されば此軒に玉壺の二字を題せられたるは、一大事のはんじ物にして、町代宿老も分別の頭を傾け、老功の道具屋もこの壺の目利は及ばずとや。實も酒にあらず、茶にあらず、まして塩砂糖づけにもあらず。さては仙術に天地をちぢめし市中の壺かと、潜に内證を聞合すれば、是はむづかしき古みにはあらで、只此亭の入口はなほだ窄けれども、内に閑地の廣きかたち、尋常の壺に似たればいふ也とぞ。さてこそ所／＼の入れも、彼上人の狛犬はまりとなりて、まことに分別は一生の損也と、世にほださるゝ理屈人は、此壺の底がぬけて此曉にも夢はさむべきにぞ。

松操菴記

かくいへる閑居は、塵境にありながら、庭に千草の松陰ふかく、寂寞山中に彷彿たり。あるじはその閑にふけりて、もつばら煎茶に遊べりとぞ。そこに安置せる大悲閣あり。さぞな靈驗もあらたならめど、まつたゞ此庭の景色をそふるぞ尊とかりける。さればしめぢが原の御うたも、こゝに五文字を吟すれば、たゞ茶のめとこそ聞ゆなれ。あるじこゝに餘白をまうけて、一句を請うてやます。君見すやかの御製に、枯たる木にもはなさかせむとは、もとより木とは歳寒の操に其用なきに似たれども、よし一鼎の煎茶とて、そのひかりにもれざらめやと、半掃庵の狂夫筆にまかせてとめをふさぐ。

落葉にもたかば花香の誓あり

瓢長者傳

巴陵舍に一の瓢あり。其かたちをかしく曲れり。曲る物は全きとか、久しく爰につかへて許由がにくみをかうぶらず、鉢扣にも奪はれず。あるじも中流に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ。むかし不之庵の翁は是を褒稱して、長者瓢の三字を銘せしより、頓て此名を打かへして、みづから瓢長者とは名乗ける也。長者の自稱必しも其故のみにあらず。此瓢に不思議ありて、酒を出す事綿々として不止。是仙術にも幻術にもあらず。只一婢に阮宜が杖を持せて、一度市中に往來すれば、朝に尻の輕しとみえしも、忽然と夕に満り。かゝれば宇治の物語にいへる姥が米は盡る期有とも、此酒は盡る日あるべからず。むべ也長者の號ある事。あるじ我に一語を求む。卒爾

に記て贈るとしかり。

名亭説

前に洋々たる長良川ながれて、向には巍巍たる稻葉山たてり。まことにあるじの素絃子なるかな。亭に名付るに巍洋の二字を贈る。山間の月江上の風、とれども禁ぜず用ひて盡さんには、何ぞ必しも知音をとほむ。

悼六々庵二辭

桃は盛りに梅は散過る此曉を世の見果にして、六々庵のぬし身まかりぬ。當時蕉門に俊良の才、世ごぞりてをしむはさら也。我にはことに廿年の推蔽をとひしし。たしみのみならず、かの父貞靜は、季吟老人に道を學びて、其世のすき人は名もよくしれりとぞ。我祖父の野双といひし、又同じ門下にかずまへられ、たがひに顔む。

與自若庵文

ものゝ足る日も自若たり、物たらぬ日も自若たり。顔子が一瓢の花垣ねに白くさきて、其たのしみをあらためず。善哉。馬山子、予に菴號をもとむるに、自若の二字をおくりて清貧の生涯を稱す。もし千兩のこがねをひろはゞ、それも又自若たらむ。

しれるほどはしらず、多く探集には名をならべたれば、いでそよ笹の一よならぬちぎりと、つねに其ことをいひかはしつれば、猶一しほの袖はぬらしける也。西行法師の願足れる其きさらぎの花のかげに、望月の頃は過しぬれど、春は追手も西にふきて、彼きしの船路も便あしからじと、いさみぬ世のたのみに、今は此わかれをなぐさむばかり也。

蝶鳥もいざ涅槃會の帝ついで

名亭辭

夕がほにあすの米あり袋あり
いざよらば此居をさして三富亭とよはむとは、なにをかさすや。只物のよきほどなれば也。人或は三つの心を深めて衣食住と判ぜんに、それもよし。雪月花とかぞへむにも、はたうらやまるべき住のなるべし。

花と見せ綿とも見せて雪の宿

長榮寺碑

何にかも人は忍ばむなき跡の
石にはかなき名はとどむとも

辭世

病來辭世路、久隱舞津、農八十余年、夢驚回曉寺鐘
きのふけふと思ひつゝ經し身の程ぞ

中／＼長き世はかぞへぬる
短夜やわれにはながきゆめ覺ぬ

書 林

京新町二条上

西村平八

大坂心齋橋筋順慶町

柏原屋清右衛門

尾州名古屋本町二丁目

風月堂孫助

江戸本町三丁目

西村源六

岡本町筋北八丁目通油町

萬屋重三郎板